

日 記 昭和二十年

昭和廿年一月一日 (宮部先生宅に新年の挨拶)

望月さん田崎さんと三人そろって宮部先生、亀井先生のお宅へ新年の御挨拶に伺う。戦時下のさびしいお正月ではあるが、朝皆でそろっておとそをのんだ時、かすかにお正月の香をかいだやうな気がした。

望月さん、今井君、河瀬、各々の目的地にむけ出発。

一月二日 一人ぼっちの舎内平穩。

一月三日 寒い寒い。相変らずの淋しい一人。

一月四日 (水道管破裂)

大雪降る。水道鉄管破裂す。今井君帰舎。

一月五日 夜、戸倉、平岡君帰舎。そろそろ揃ひ出す。

一月六日 (井戸ポンプ直すが・・・)

水道は出ないし直しには来て呉れず、仕方なく井戸ポンプを直す。直って汲み出せば何と汚き水であることよ。河村君帰舎。

一月七日 帰省部隊ぞくぞくと帰舎、元の賑かさにかへったやうである。河瀬、草地、北野、十河帰舎。

一月八日 (新年のコンパ)

新年のコンパを開く。道徳地におちて猛烈なジェスチュアに抱腹絶倒。晝頃石川帰舎、夜は大望月さん、やうやく士別より到着。

一月九日 比島の戦勢絶頂にして益々緊迫。

一月十日 (日付のみ記載)

一月十一日 比島決戦壮烈を極む。

一月十二日 久し振りに午後から圓山へスキーに行った。気温もよく快調。最近比島戦闘大いに激化、スキーをしてゐる中にも氣が氣でない。同胞よ、頑張ってくれ。憎たらしいヤンキー奴、糞くらへ!

一月十三日 土曜日 (スキー、比島戦闘)

流石土曜夜、明日は予科も休日、何となく楽しい。スキーに行く予定有、大いに有り。こんな寒いのに舎では春の様なお話がアチラでもコチラでも・・・。

比島戦闘苛烈! 今後日本同志の血のつながりを近く感づるときはない。私も今井君と同じ様に。同胞よ、兄弟よ、頑張ってください、頑張らませうと祈ります。北野記

一月十四日 (日) (すさめきたる事?)

早朝から山! 山! スキー、お祭りさわぎの人を見てきた。我ら不在中北の眞冬には似ても似つかない、すさめきたる事ありと。生憎拝顔の榮に浴せなかった。スッタ、スッタ。新角某氏ドテラにて茶を進めりと。あゝ。

一月十五日 平穩、異常なし。米配給。

一月十六日 此ノ頃ノ朝ハ札幌ニシテハ割ニ寒イ。本日ヨリ醫學一年目解剖始マル。興味津々タリ。食慾異状ナシ。

一月十七日 水 舎内平穩無事。寒い。今夜は特に寒い。

一月十八日 木 (零下二十五度)

昨夜寒かった為か今朝は零下二十五度。鼻の穴が氷る。どうも寒いのは余りすきでない。村上氏の父君来舎。

一月十九日 金曜 晴 (帝国座に映画を見る)

足が冷え冷えするのに眼を覺ます。今朝も非常に寒し。寒国育ちの僕が感づるのだから相当のものだ。夜總勢八人で帝国座に足を伸ばす。映画は「櫻の國」。理智的な高峰、一寸鈍に見える水戸とのコンビはあの筋にぴったりと合ひ、久し振りに名画を見た。僕としては此の様な家庭的な映画が最も価値ある様に思はれる。エノケンの映画の如きはその場面場面で

ゲラゲラ笑って御仕舞であるが、此の様な映画は後々迄も心の良き糧となると思ふ。現代の映画は余りにも時局便乗的で、製作企圖もすっかり換へられているのは実に残念だ。映画は宣傳と娯樂を兼ねたものださうであるが、もう少し製作者も良心的に行動して貰ひたいものである。

一月二十日 土 晴 夜決算あり。予科生は入学試験を当て込んで帰省する。平、戸倉、村上帰省。

一月二十一日 日 朝からスキーに出掛ける者多し。但し工学部の一年生は材力の試験あり。佐本缺食。

一月二十二日 月 (教練、部屋換え、また二人部屋)

朝からスキー教練、昨日行って又今日、然も飛行場迄銃を背おふて行ったのだからいささかまいった。午後又二人制となる為部屋換があちらこちらに行なはれる。明日より石炭配給制一日箱に七分目は少し心細い。

一月廿三日 (火曜日) 今日から石炭七分目、少くて心細きこと限りなし。予科の入学試験は三十二題出たとの事。

一月廿四日 休は實に快適、毎日のやうにスキーをやる。

一月二十五日 吹雪の林の中を歩きながらさてどうしたものかととまどひするが横なぐりに吹きつける嵐、新雪を背一ぱいに浴びながら「フタゴ山」の新雪を滑って来た。夕方北野さんの〇〇来る。(石田)

一月二十六日 心ゆくばかり浅緑りに晴れたる日なり。スキーにて幌見の方へゆけば新雪一尺もうづまりて登りに一苦勞せり。佐本

一月二十七日 (宮部先生を訪問、お子様入院)

夕方北野、河村、村上の三君舎長先生を訪問。先生はお元氣の御様子。お子さんが肺炎で入院されたる由、恢復を舎生一同御祈りいたします。佐本

2月17日 <負けそうな気がする>

春らしくなって来た。昼は陽ざしが眠気を催す程に快適に暖い。氷柱を伝って落ちる雫も大分頻繁になってゐる。

小生目下医学生最後の試験。「大東亜戦に負け相な気がする矢先、何をぼやぼや試験なんかさせて吾々学生を遊ばせて置くのか。どんどん引っぱって行って呉れぬか」とは昨日勉強するのが厭になって小生の所へ遊びに来た友人が言であるが、小生も試験勉強が嫌になった。昨日日本近海に敵機動部隊が来て、艦載機が空襲にやって来た。

なんとかやって貰ひたいもの、癩に觸る。(望月)

2月17日 朝カーテンにうつる陽射しを見ると床の中で余暖を楽しんでゐるのがはづかしい様になって来た。東京からの手紙には寒い寒い何年ぶりかの寒さだ、札幌はさぞかし寒からう等と云うて来るのが妙な感じがする。併し戦局は益々利あらず、我らも「引っぱって行って呉れぬか」ではなく吾々から進んで「征かう」でなければならぬのではないだらうか

又も長靴消失あり、憎みてあまりあることなれど此方の不注意にも責任なきにしもあらず、御注意肝要!! (石川)

2月18日 日曜日 朝起きたのが十時過、今日でも日曜はよく寝る、いい天気である。

日ざしも何となく春らしい感である。雪さへなければなければとうらめしい。東京等はもう梅の盛りであらう。東京といへば空襲の被害も大きいであらう。午後ストーブをつけて後何するともなくしてゐる間に夕飯の拍子木がなる。とかく日曜になると何もできない、日曜日は休むものといふ長い習慣によるのかもしれない。五時、我が潜水艦と硫黄島の戦果あり、硫黄島は完全に要塞化されてゐるとの事なれど物量を誇る敵なれば油断は出来ない。(K. K)

- 2月19日 昨日に比すると割に寒い今日であった。敵が我が懐に迫って来たといふのに何とのんびりした春であらう、陽射しはやはり暖く心を浮かせる、石田、平岡君帰省、戸倉君余市へ。
- 2月20日 朝寒し、
硫黄島上陸発表さる、戸倉君余市より帰舎、直ちに帰省。
- 2月21日 今朝も寒かった。佐本君荷造りに奔走してみた。夜帰省、変わった事なし、今井君角田へ。
- 2月22日 昨朝と同じく寒かった。マニラ皇軍奮闘を報ず。
- 2月23日 朝雪降る。再び暖かくなったが、夜などは流石に寒い。小母工合悪し、石田平帰舎。
- 2月24日 暖い。電車道は土が出て何となく心を柔げてくれる。だが汚ならしくなって来た。佐本君帰省、再会の日は？田崎さん荷造りに忙しい。
- 2月25日 暖い、予科生諸君定休日、スキーに出かけるものあり、小生はストーブ（食堂）のふちで一日過ごす、望月さん猛勉、戸倉君帰省、
- 2月26日 <海軍依託学生に化学の北野君を送る>
暖くなったり、寒くなったり嫌な気候である。
本日海軍依託学生の発表あり、我舎からは化学の権威北野君を海軍に送ることになった。日本海軍の化学、期して待つべきものあらんか。（河村）
- 2月27日 今日も亦晴天、此頃は晴天が続き春の来訪も間近い事を思わせる。田崎さんも離札が近い内、望月さん試験に大奮闘、予科生もそろそろ試験期に入る様、悲壯極むる現下の学生的身としては感情をちとおさへて真の日本人の血のほとぼしりに従ほう、現実の生活に生かす理科の日本学徒のあり方は難しい。（北野）
- 2月27日 変わった事なし
- 3月1日 変わった事なし
- 3月2日 変わった事なし
- 3月3日 今日も晴、節句なり、少し春らしくなって来た。
- 3月4日 山本さん朝帰って来る。太田の話聞き一同憤激 [付箋のため読めない]
- 3月5日 近頃はだんだん春らしくなり、電車通も相当融けた、早 [付箋が邪魔]
- 3月6日 予科生も十日から試験との事。一生懸命勉強 [付箋のため読めない]
- 3月7日 今日は望月さんの送別会であった。午前中に授業は終り [付箋が邪魔] 半頃より宮部先生はじめ青木さん、亀井さん、奥田さん、時田さん等五人方々御出席なさる。おぼさんの作った赤飯も全くおいしかった、一同大喜び。望月さんも相当皆に云はれ小さくなってゐたのは気の毒な程であった。
- 3月8日 望月さん今日は新婚旅行士別に朝早く出発なさった。6年間の学業を終へられ、解放された様な気持で汽車の中ではさぞ心ゆくまで話す事が出来たであらう。うらやましい位。
- 3月9日 近頃は少々よい天気が続かない。
山本さん帯広より帰っていらっしやった。
望月さんも今日帰って来たが、又夜士別へ
- 3月10日 今日は陸軍記念日也。この苛烈な戦局下に第四十回の記念日を迎へ、我々の士気いよいよ旺盛なり、予科生の試験は今日から開始された。皆余程出来たらしく朗らかであるが自分は何だか陰気な気持がしてならぬ。森工の試験〇〇コンデか (A.S.)
- 3月11日 予科生久し振りの日曜日で試験中にも拘らず、夜遅くまで駄弁を振ふ。明日のコンデの様子が思ひ知られる。三月にも拘らず大吹雪、又屋根が漏って来るのではあるまいか
- 3月12日 近頃久しく絶えていたピンポンが始まり出した。他は変りなし。（平記）

- 3月13日 予科生最後の考査で頑張っているが何となくのんびりしている様な気がする。
俺達のときもこんなだったかななんて考へてみた。
- 3月14日 予科試験終了、万才哉。
- 3月15日 <兵器の分解――意義少なし>
工学部、理学部、兵器の分解等で白石に行く、聞く人多く場所がなく意義少し、夕方から
Grand hotelで望月さんを中心に、望月さんの**Frau**も出席、二人の前に栄ある様祈るや切、
映画にみんなでそのあと行く、今井離舎。
- 3月16日 工学部、理学部白石へ、終日風ありて寒し、春の来らん日何日か？
- 3月17日 久しく絶えてみた東京の新聞来る、10日の空襲は相当猛かった様、名古屋、
大坂、神戸と次々にかうむる空襲の惨、打たん哉、鬼畜米英！！
今井、帰省。
- 3月18日 日曜日、予科生は臨時休業、朝から寒々と夕方まで吹雪が続いてみた。あのべ
と々々雪がしんしんと降りしきって窓に快よく当ってみた。同輩の某君昨夜来腹を壊して
正午起床、予科生一同試験も終り、酔生夢死である。舎は閑散、朝、戸倉帰省（石田）
- 3月19日 春浅し、毎朝登校の時の柔い朝陽の光、顔にあたる**Luft**の程よい冷たさも気持
がよい。然し下校時の道の悪いのはボロ靴しかもたぬ身には一寸つらい、舎内無事（河瀬）
- 3月20日 小生本日参補を初む。朝勝見の小母さんが見えられた。何でも出世されて何だ
かの代表で出札された由。非常によい天気、非常に暖い為雨漏りが著しい。
「牧笛」の原稿は本日をも以て締切りである。飯島さん、田崎さん、上村さんへ廻し書きを
したが、さてどこへいったか。（村上）
- 3月30日 <愛国者とは？ 真正の善人とは？>
机の上に置いたまゝ多忙なまゝに忘れておった、今日やっと落着いて日記を記す。
明日は愈々札幌を発つのである、何か淋しみに似た気持があるが、再び此地を踏む機会も
在ればと思へば、そんな寂寥も幾分、軽減されるし又、もっと自分自身に矛盾のない生活
に入ることが出来ることを知れば喜ばしい、内村鑑三氏の言葉から一言かりて舎生諸君に
よびかけたい。
『愛国は善なり、然れども愛国の美德を養成するに於て最も功ありしものは誰なるか。国
史の研究必ずしも愛国者を造らず、かの狹隘にして世界の形成に達せざるが故に国家百年
の計を誤らしむる者は、自国を以て世界の中華と見做し、五大州は貢を皇国に奉らん為に
造られしが如くに信ずる狂信家にあらずや、爵位恩給を以て繋ぐ愛国者は一旦緩急あれば
義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼するの徒にあらざるなり、愛国は詩歌の如く天性
なり、国史に通ぜざるも愛国者は愛国者なり、官禄を受けざるも愛国者は国の為に死する
なり、国人に捨てられあるも愛国者は国を捨てざるなり、愛国は精神にして待つにあらざ
れば之を外部より敲き込むこと能はざるなり。
愛国の何たるかは愛国者のみ知るなり。
世間ありふれの愛国者、礼拝的愛国者、表誠的愛国者は、博士ジョンソンの所謂「愛国者
にして愛国てふものの背後に隠れる佞人」なり。
愛国者を造る難し、善人を造るは難の難なりしものなり、功利主義を以て養成したる善人
は利益のための善人にして実に頼むべからざる善人なり、純粹論理学を以て養成したる善
人は消極的善人にしてストイック派の善人の如し、己を守るを知ると雖も他を利することに
疎き善人あり。古人の善行を暗誦してなりたる善人は自己の特性の発達せざる鸚鵡的善
人なり、而して真正の善人とは己の利を求めざる人、己が事のみを顧みず人の事をも顧み
る人、天より賜ひし所の賜を忽緒にせざる人なり、自己を害はずして他を利し、己を潔く
すると同時に自己の特性を開発する理想的善人たらんとする道は何処にありや。
- 3月31日 工学部昨日でやっと長かりし試練を終へてのんびりする、数ヶ月たまった洗濯
くやる
夜七時十八分で望月さん終に出発さる。もうあの鼻唄も〇〇に聞けないかと思ふと嘘の様

な気もする。

四月一日 愈々四月、でも朝から薄曇り、今にも降り出しさうな天気のみで一日続いた、今井令弟を伴って朝帰舎、彼の一家揃って札幌に疎開される由、平君帰省、戸倉君小樽行きといふわけで寄宿舎は非常に閑散になる、小生如きも終日惰眠を貪り過す、夜ストーブのあくを投げに出てみるとすっかり靄がかかって植物園の木立もおぼろにかすんで見えた。(石田)

四月二日 今日も昨日と同様薄曇り、少し冷味を感ずる程度。小生今度土専に入った後輩を連れて四丁目方面に出て歩く。新丸が、そして新角がちらほら散見されました。

夜はミーちゃんの入学祝ひを副舎長室にて行ふ。奥田先生をお呼びして伴に楽しい一時を過す。

八時半頃皆連立って風呂に行った所、四丁目あたりから歓声が聞えた。非常に盛大に応召兵を送る行進の様に思はれた。(石田)

四月三日 弟の転校の事で狭いやうで広い札幌の町を字義通り東奔西走。札幌の街も今が雪解で最も汚いが、汚い中にも春の到来を告げるものを身に深く感ずる。新緑の春よ、早く来い!! (今井)

四月四日 美恵ちゃん初登校、山本之又初登校、お互に嬉しそう、そういへば予科も授業初め、私達も然り、早速有機の実験が初る。35人入れたには入れたが、教室が小さい、20しか実験は出来ぬ筈。

15人は3人づつ5部屋に配属される、各教室(有機)に入ってみたが、私の割あてられた人は航空燃料方面の件。

実験の始まる前に助教授の話があった。

色々漫談してあった。がどうも総合してみると、吾々の方では良いだらうといい加減に考へてみても学部の先生方は心の中では悪く思つてゐるらしい、それを口に出して云つてくれぬので尚更こっちは漠としか考へてゐない、突然、よこつらをはりたをして置いて、学校の中なんてそんな甘い物ではないぞと、冷たくこっちの狼狽等おかまひなしに笑つてゐる。

まあ大体こんなものが、人の社会でせう……と私は今日考へました。

やっぱり甘い口をきかされても吾々各自は心の中で少しも自分の行ふ事に関する限り相当の規約の中で責任の持てる態度をとっていないといけぬらしい、ともかくも、春の来訪は吾々にとって待たれる。北野

4月5日 朝食は食堂で食す事にする。

石炭も亦配給制に。

4月6日 兼坂君に学校で会ひ、入舎希望の件、来舎を頂き、明日入る事にする。

4月7日 兼坂、中津君入舎、夜紹介、村上帰舎。

4月8日 大体そろふ、夜みんなでさわぐ、十河君のみ未だ、草地も今日帰る。

4月9日(月曜日) 吾々医学部登校開始、早や新角が入つて来て不思議ノ感ヲ深ウスル。

鯨ガ大イニトレテ吾人ノ食卓ニ香バシイ味ヲ与ヘテキル。

春ハ益々麗ラカデ、平和ト全ク同ジデアル。

拳骨中尉中村氏本学ニ再任シ理学部ヲ担任サレルトノコトニ北野副舎長大恐慌ノ様デアル。

「牧笛」モ明日迄ニ原稿ヲシメキリ製本スルコトニシマス。(朝十河君帰ル) 村上記

4月10日 火曜日 今日朝から元気がよい、七時起床、春らしくなり全く気分が冬の朝に比して異なる。今度からは今迄より一寸は早く起きるつもりである、今日から授業である、もう二年になったのだ、早いものだ。

午後休講にて割合早く帰れた、夜十時半就寝。

4月11日 朝から小雨そぼ降る中、今日も又登校する、**Steam**の通らない教室はまるで牢獄の様な寒々として感じを与へる。窓越しに街路樹が、電車路が濡れているのを眺めながら一日を暮した。

- 4月12日 今日昨日にひきかへて快晴なるも風あり、馬糞風？
- 4月13日 晴、寒し、手稲山白し。
- 4月14日 変わったことなし。
- 4月15日 晴天なり、予科生は学校あり。小生何する気力もなく蓄音機と碁とで終日せり。
憐れむ可きかな？
- 4月16日 寒い、何だか風邪気分で気持ちが悪く、馬鹿に腹立しいことばかり。
何時も日記を小生の机に二三日停滞させては慌てゝ一気に二三日分を書いて廻す始末、日記は其の日につけなくては駄目である、少なくとも気分のレコードは一夜あけたらもう駄目なものであるからである（草地）
- 4月17日 今朝少し早く起きて窓の外を見たら“朝モヤ”がたちこめてみた、春はたのしいものだ、然し未だ少し寒い、あたゝかい春の訪れは敵の訪れになるかもしれない、今朝の新聞にも敵機二百機が帝都を盲爆した。
札幌にも近いだらう。平和？な札幌の様子を見てみるとそれが遠い将来の様な気がしてくる、悪い事だ。（東）
- 4月18日 晴天ナルモ風強シ、少シ寒イ。
今井君ノ弟ガ外出シタ、モウ帰ラナイトカ。河瀬
- 4月19日 毎日を平凡に送ってると一日はそして一時間は長いものだ、だが振返るともう四月の下旬にならうとしてゐる、今日、フランスのデュアメルの小説を読んでみたら恰好の言葉を見出した。
「短いのは歳月なので、分秒は長いんです、そして私の人生は分秒から成立ってゐるのです」
本当に上手に表現したものだ、吾々は現在行はれている事物に対しては必然的に視角が大である、が過ぎ去ってゆく物に対する視角は時間の推移につれて小さくなる、やがて見えるか見えないの点になり、更に忘却の闇に消え失せるであらう。そして忘却の闇の中にぽっかりと浮び上るもの、或ひは明るく彩られ或ひは光沢を失って夢の如く浮ぶもの、それが記憶なのだ。それが追憶なのだ。人間の儂さ、又過去の印象をその俣に甦すことの不能なるにある、いかに多くの文人が美しい物語を書いたことであらう、何の“おかまひ”もなく時間が経つ、吾々の行為、感情、思想は汽車の突進に後へ後へと跳び行く山、畑、家々のやうに忽ちにして過去のものとなる。この時勢で悲しい哉、吾々は真の平静を失ってゐるやうだ。
少なくとも自分に於てはさう認める、感情の赴く俣に下らぬ事を書いて紙面を汚した。
美恵ちゃん、はしかで折角の嬉しい学校へも行けなくて退屈さう。十河氏帰省。（今井）
- 4月20日 今日から、割と、しわい先生の下で実験の手伝ひである、然し、うるさく実験上の注意があるので大変うれしい、やっぱり化学の実験にはそれさうとうの作法がある。之にはづれゝば不作法となるだらう、こういふ事は本からはとても得られない、舎変りなし、兼坂室蘭へ。
- 4月21日 戸倉援農先へ、今日も亦遅くまで実験、明日、舎のArbeitある由掲示する。
田崎さんから愉快な手紙、御無事を祈る。
望月さんが此のノートを日誌として呈せられてから横書きの日誌と成って余り多くも書かなくなったが、今迄と違って考へた事なりと記しては如何？ 夜石川、十河とまたたく間に決算をすませる。1日食費40銭也、夜、山本新角祝に多勢を具して映画に出る、土曜日の夜は静か。（北野）
- 4月22日 今日朝からArbeitかき根をこはして薪に、又玄関の方の立木（かれた物）
diameter 50cm, length 8米位の物二本次々に倒す、此に意氣を得てテニスコートわきの
diameter 80cm, length 15米の物を倒す。実に壮快なり、たゞちに枝をはらって運ぶ。今年の薪も之で大丈夫といふ処、一日中大いに体をつかひ、消耗す。河村、北野、米屋、公区長をかけめぐって5人分10日間の食糧をもらってくる。米の不足もどうやら之で何と

か解消？一日中健全にくらす。十河、亀井先生引越すに手伝ふ。夕方帰る、戸倉夜帰舎。
4月23日 兼坂室蘭から帰る。夜、大坂の辻君農学部入学の為め入舎、明朝から食を取る。
河村の部屋に入る。

小生頭痛で就床、草地、小杉も身体調子不調。以上 北野

4月24日 春、毎日晴天が続いてポカポカ暖い、本当にのどかな春である、然し、自分らがこのやうにのんびりしてゐるこの瞬間も沖縄に於ては地のにじむ血戦が続けられてゐる。ドイツの首都ベルリンは今や全市戦場と化してゐる。ドイツの全国民は今、生死の竿燈に立ってゐる。我等の同胞、我等の先輩は特攻隊員として皇国護持の為敢然と敵艦に体当りしている、而るに我等は学徒として学の道に進んでゐる、そして札幌にはのどかな春が来てゐる、我等須らく神聖なる自分の本分に邁進して自ら悔いない、特攻隊将兵に恥ぢない生活を為すべきであると。 河瀬

4月25日 【付箋で読めず】 アルバイト。

4月26日 晴れてゐるが風が冷い、ベルリン市遂に縦断さる。

4月27日 曇り遂に雨となる、寒し、札幌もいよいよ強制疎開とか。寄宿舎はどうやら疎開などしなくてもよさそうだ。時勢は吾々に容赦なく刻々と変転してゆく。

4月28日 理事会開く、北野副舎長孤軍奮闘す。新入舎生の紹介をかねて晚餐を宮部先生、時田先生、奥田先生とともにす。鯨料理、石田、平、戸倉、三君帰省す。（草地）

4月29日 <宮部先生宅の畠を耕す>

目出たき天長節を迎ふ、式には舎から5名位出席す、昨日の鯨を外に乾す。朝曇雨模様なれど昼頃より快晴となる。祝の赤飯を食ひ後、北野さん、村上さん、山本さんと自分と四人で宮部先生の宅に畠を耕しに行く。3時半頃帰舎す。夜、石田さん平さん帰舎す。（辻）

四月三十日 <予科の入学式>

一日中泣き出しさうな天気、大分寒い、もう明日から五月といふのに何となく心細い、でももう春だ、帝大病院の桜が開くのも間もなくであらう、それを見てから我々も遙々網走くんだりまで出掛けたいと思っている、予科の入学式行はる、朝意気揚々と登校すれば既に新館前には、ネーモーさうなのと堅さうなのと、消耗した様なのが沢山集ってそれでも、一応真白い白線をつけてゐるのも心強かった。教練の時雨天体操場の傍にみたら予科長と宇野さんの蛮声が聞えて相変わらずだなと微笑しく思った。

夜は九時から今朝入舎したマス田、清水両君を混へて自己紹介を兼ねた余興大会、大いに愉快であった。（石田）

五月一日 五月になった、朝から冷い五月雨が降る。

五月雨や相逢傘の人もあり

草地君、山本君と共に登校してたはむれに詠めるものなり。

僕の腹はやっと鳴動をやめた、小鳥が高い調子で鳴いてゐる。

小母さんの工合が悪いらしい。

私は土曜日の晩はいつも集って文芸座談会をしたいと考へてゐる。人数は何人でもいゝ。

ヒーターを囲んで（電燈検査人は読むべからず）一週間に読んだもの、考へた事を語りあふのは如何に楽しいことであらう。（村上）

五月二日 曇、長いと思つて居った三日も今日を以て終りである、学校の様子がはっきり分らないので登校す、昼食の食べ方もはっきり分らないため昼食をぬく、寒い日だ。（清水）

五月三日 久しぶりに誠によいお天気であつた、今日迄の毎日※※の憂鬱も一度に吹飛んでしまった。のんびりとした足取りで校内を歩く、天も入れとばかり腹一杯に新鮮な暖い空気を吸込んだ。

北野副舎長殿横須賀に行く事になる。入舎以来何かと御厄介になつた、今別れる事は物足りなさを感じずる。

入隊の上は自分達の分も大いに活躍して欲しい。（兼坂）

五月四日 <北野副舎長の送別会>

春とも思へぬ冷い風、雨を交へて吹き荒ぶ。夜宮部先生始め亀井、奥田、時田の諸先輩をお招きして北野副舎長の送別会を開催す。後任副舎長として河瀬君決る。次でに新入舎生紹介あり。深更、舎生の誓ひ及び北野君歓迎〇〇〇〇〔原文ママ〕をやる、消耗

五月五日 夕食後、大挙して錦湯を占領す、夜、北野副舎長の友達等きて遅く迄賑やかなりき、兼坂君の厳父来舎さる。

昼、舎の先輩小野氏来舎され、二十円寄附を受く。

五月六日 北野さんの横須賀行きについて軍と文部省との指令喰違ひて北野さんは進退すこぶる極まれる恰好なり。けれど理学部の意見と更には自己を叱咤する意志の強烈は遂に横須賀行きを敢行することに決定す。

朝、自分の島に更に舎への愛着をこめて鋏をふるふ姿あり。黙として崇し。自分等の舎に対する愛は、北野さんてふ円満なる人格を慕ふ気持と同じにて舎に対するか、北野さんに対すか、まこと舎の全人格は北野さんを以て表象し得べしと思はれ、今別るゝに際し、あたかも自己の舎を去り行く如き寂しみを感ず慕はしさの高まるを感ず、宮部先生證券を持って来らる。石川氏お相手。予科生、新旧丸の親交運動会。敢闘の様子歴々。宵、その塵を流しに錦湯に舎生大挙赴く。清水腹痛一人臥床す。村上氏親叔の死去あり、病院に赴く、弔。兼坂氏父君と石切山に遊ぶ、夜父君帰途につかる、舎の増産島態勢ほぼ成る、更に協力、爾後の活動を期待するや大也。(毒人参)

五月七日 <北野さん横須賀に征く>

北野さん勇躍征途ニツク、バツクヲ提ゲテ電車道ヲ歩ム姿、緑ノ影トモツレテ、トケテ来シ方行ク方ハルバル偲ブ毎ニソバロ如何ニ大キナル流動性ヲモッテ吾ガ生ニ押及ボシタルカヲ秘カナル驚キノ中ニ北野サンノ生命力ノ強サヲ思フ、遂ニ憶■遂ニ心ノ指標ト慕ヒシ人、汽笛一声ト共ニ戦塵ノ最中ニ等シキ横須賀ニ征ク、只茫然。■沓ト流ル、涙止メアヘズ、二筋ノ鉄路白々ト光リ、手稲ハ未ダ雪、空晴レタルモ街ハ五月雨ニ濡ル、如ク遣瀬ナシ、只々其ノ健斗ヲ祈ルノミ、然シテ彼ノ遺シタル句ヲ時アリテ秘カニ思ヒ起シ、アリシ昔ノ戯言ヲ耳底ニ復ビ呼サンノミ、笑顔ヲ作レド今シモ崩レテ瀧トナラントス、ア、

小母サン頭痛ニテ臥床、夜ハナホチャン炊事、風呂ニ続ケテ四日通ヒ膚白ケントスルカ、村上氏親叔ノ葬儀ニ参列、中沢、中村氏訪問、平氏メランコリート自称、河村氏話相手ヲ裏ヒタル如ク心中如何ニ淋シカラン、清水体の調子悪キカ。

十河朝帰舎、舎笑声堪エテ淋シ、今頃函館頃カシラ。

晴レタリ小雨ソボ降りタリ物憂キ日也(毒人参)

五月八日 大詔奉戴日なり、鶏鳴曉を報ずるや山本氏と共にたま※※札幌神社に参拝せり、連日依りの曇天なれど桜の蕾のふらみ幾分色付きたるも見る、境内はすこぶる静儼なりき、さく※※と踏む玉砂利に自ら心浄みたり

愚輩明日の帰省の為め(観閲点呼参加の為め)今日依り休暇を取る、苗穂ニ行き乗車券を求めて来る、出発は明日午後二時十五分の予定なり、村上氏今日依り学校に出席せり。

炊事の叔母さん健康を回復せり、即日朝依り炊ぐ、愚輩南瓜を播種す、幾分か寒さを感じ曇勝なりし天気も午後になり快方にむく。

五月九日 中津第一回帰省の途に就く、二十五日迄休暇とか、唾涎おく能はず、晴曇交番す。

(Y)

五月十日 村上氏討論会を計画、工専、林実作業予定決り其の為の壮行晩飯会を行ひたる序に行はんとす。

臨教一年目奈良岡氏の媒介にて入舎希望すれど何せ満員にてよき返事与へられず、平、石田氏等旭中会にて夜遅し、戸倉夜間外出、河村氏種にする予定の唐黍を食す、憶乎、同情に堪えず。(Y)

五月十一日 曇、午前九時三十分警戒警報発令B 2 9一機秋田より岩手を偵察、本道への来襲も近からん、舎の防空委員決定の必要あるを認む、更に防空壕も多くするの要あり、近

頃、室内にて乱暴なる挙止を為し、為に家屋破壊の被害甚大なり、すべからく相撲は青天井の下にてすべし、オルガン演奏及び楽器一切は各人の反省により七時以後謹まれたし、蓄音機も云はずと知れたこと、インテリゲンチャの襟度！！

防空要員は毎夜の燈火管制に関し協力せらるべし。(Y)

五月十二日 小雨 相変わらず雨降り、いささか気がくさって来た。一寸一時晴れ間もあつたが一日中蔭気くさい日であつた(S)

五月十三日 一週間に一度しかない日曜日がこんな天気ではさっぱりたのしくない、製図もあきたので午後より豊平に行く気だ、道路は非常に悪い、歩みがにぶる。

五月十四日 久しぶりに誠によい天気であつた、せめてこれからでも毎日この様な天気であつてほしいな、今迄のはっきりしない気分も天候と共にすっかりはれてしまった、北野副舎長去りし後、何となく淋しい感じもこの六号室の如く晴れやかな大なる心を持って打消して行きたい。(S)

五月十五日 昨日に倍した至晴天、学内の若草の上に何ごとかを語り会ふ群多し、桜の花も到る処に咲き乱れて居る、もう満花の時期だらう。

午後四丁目辺を歩くに人出の多きに驚く、よくもひま人が揃つたものだと、しかし、皆何か多忙さうせはしい足取で歩いて行く、何人の顔も春天の如くはれやかな顔であつた。

戸倉君急に床について熱が三十九度もあるときく、ふだん元気な彼があのように床につくと、寮の中も淋しい。一日も早く元気になってほしい(S)

五月十六日 朝辻君帰舎さる、お天気又しても雨模様、食糧生産に支障無からむことを祈る、舎の飯も十日に三日は澱粉になつた由で朝は団子汁、たまには又よきものなり。

五月十七日 本日も又ぐずつたお天気なり、村上君もどしたやら熱を出して寝ついてしまった、夜、兼坂君、戸倉君と〔映画＝映写機の画〕へ出かける、凄いい人出なりき、山本君、平君等は豊平へネギを買ひに出動す、夜廻りに御安心。

五月十八日 曇後晴、夕食後アルバイト、ネギ植え、南瓜種播き、何とか収穫を味ひたいものである、戸倉君又も高熱、昨夜が悪かつたのであらう、許し給へ。石川

五月十九日 今日は晴、然し明日の天気は不明である。

河瀬副舎長月寒の兄さんの所へ外泊されて留守。

戸倉君の発熱反能も三十七度Cに下る。

工学部大火、河村氏、石川氏発するに「快的！」。

山本君女性心理学研究の為、近頃附近の小さい女の子と仲良くなつてゐる。我輩の畑を荒して頗る参る。

来週の土曜日は、文芸部主催映画総見会を行ふ(文芸部相)

釧路国足寄郡陸別村川向佐藤一郎方清水和君より書簡ありたり、成可激励状を送られん事を乞ふ。

五月二十日 予科生出勤日。昨日より雨の降れかしと祈つた甲斐もなく、少し風があつて寒いけれど朝から快晴。斯る時に勉強するこそ戦時下学徒の面目(？ひがみ、負惜しみに非ず)とばかり鞆を下げて出たものの、学部の人達が窓を一ぱい開けてさんさんと陽光を浴びてゐるのを見ると、いささか癪にさわるね。でも学校は幸ひなるかな、午後何とか休講となり、無事放免された。

山本氏近所の小さなメツチェンに植物園にさそはれて「俺勉強が一ぱいつまってるんだ」とは此の天気におや※※殊勝な心掛の人もあるものかな。T氏四丁目まではるばる碁研究に出張。(石田)

五月二十一日 昨日に引続き全く快的な天気。日中等はまるで真夏のやう、教練で大分消耗した。近頃近所のメツチェン共が横暴を極め、日中平穏なるべき舎内に騒音をまきをこす。彼等を討伐すべし？病人の為にも。

此の暑さの増す折も折、何せ十日を過ぎてから帯広に一尺程雪が積つたと河瀬氏のムッ太一より聞き全く卒倒そのもの、今年の作況が思ひ知られる。

- それにしても吾々のアルバイトは何時の頃が一番先に出さうで後にとり残されて了った。
- 五月二十二日 <学徒隊の編成とか何とか>
青少年学徒に給はりたる勅語下賜の日。
学徒隊の編成とか何とか、又とんでもないものが出来上った様だ。その癖今迄と何等実質的には異ってゐないのだ、喝！
- 五月二十三日 連日の快晴、今日は有難迷惑と云ふ所。と云ふのは午後の教練、日光のかんかん輝りつけれる所でおまけに銃剣術の防具をつけて四時迄びっちり、全く消耗。
さて吾々のアルバイト、砂川へ二十八日出発と決定した。待つて居たものが来て了ふと何となく不安な焦燥の気味に駆られるものだ。(平)
- 五月二十四日 “権兵衛がたねまきやカラスがほじくる” という言葉があるが、小生の前のM氏の畠、毎朝鳥ならぬすずめが多数餌をあさつてゐる。種をくつてゐるわけでもないかも知れぬが、いつまでたつても芽を出さぬところをみると何か因果関係をもつてゐるかも知れぬ。
- 五月二十五日 猫が鼠をとることを忘れ……などといふ表現は甚だ陳腐ではあるが、寅彦のいふ——人間の魂が気化して霞になるやうな——近頃は全くそんな天気である。
そこで、小生も製図を忘れ大いに魂を発散して霞にしてゐる次第である。そもそも勉強は偉大なる天の啓示に従つて、そこにおいて発する自由意志によつて行はねば駄目である。魂を霞にしるといふのは天の啓示である。製図をかけといふのはヘッポコ助教授の命令である。ここにおいて小生は、上述の如き結論に到達したわけである。
近頃小生の尺八は主観的にも客観的(?)にも大分上達した。仰いでは朗々碧空にとけこみ、俯しては寂々草木の精を悲しませる一管の音波、それを通して魂を霞にする
よい哉、よい哉 (河村生)
- 五月二十六日 <銭湯代を電車の切符で>
K氏がいみじくも言はれた「魂を霞にして製図を忘れる」とは之れ春の時を得たる姿である。私がこゝに言ふのはかすかに降る時ならぬ春雨が僅かにその軌跡たる絹糸の細さにも似て木立の若葉に当るのも悪くないといふ事である。まして遠くから蛙の声が聞えて来る宵は尚更よいと思ふ。どうしてかう春といふのは人の心にのどかさややるせなさを与へるのであらうか。
M氏大尽ぶりを發揮して「姿三四郎」総見帰るさうさう異様なうめき声やつかみ合ひが始まった。あゝ威なるかな映画の力。
小生その間フツンの荷造りを済し最後の銭湯のつもりで行つた所「おっとしまった、金を忘れた」仕方がないので番台のメツチェンに電車の切符でよいかと言つたら、彼女かおを頼めて「此の次で宜しいです」。然し小生も明後日よりアルバイトで砂川に出発しますから尊愛する本科マンの方「我こそ後輩思ひなり」と自負する方がありましたら宜しく我が為に一臂の力を貸したまはん事を呵々！！
戸倉、今井帰省 (石田)
- 五月二十七日 海軍記念日 小雨 蛙声、舎生
尽日春眠、春圃発芽、春緑姚麗、小童子騒 舎内
チューリップ 薬のみ残り 居りにけり 「黍風」
- 五月二十八日 朝より風在りて寒し、昨日迄の暖気何処に行けるかと思ふが如し、石田、平の二君砂川へ向けて出発さる、本年十二月迄とか、はるかに奮闘を祈る。
十時頃今井君帰舎。
風相変わらず止まず、手稲中腹迄雪あり。かかるは北海道の自然の野性さが身にしむ思ひあり、関東特に武蔵野の自然は有名な独歩の作あり、更に北海道に就いては、同じく「空知川のほとり」あり、その自然を考へる時、そこに大いなる差異あるを知る。
武蔵野に育てる我、あの蘆花の住めるが如き武蔵野の自然にはぐくまれたる我は、この三月をおくれたる北海道の自然に愛着をおぼへざるは故郷をなつかしむ心ありや、否や、黒

百合、延齡草、水芭蕉の生ふるこの地の春の美しさを感じずる事あるも愛着をおぼえず、母をのろひ、故郷をさへにくんで放浪の旅に出た一茶も遂には、“これがまあ遂の住家雪五尺”とて雪深い信州柏原にその生を終へてゐる。之が日本人の通有性ならん、海外飛雄も空しく終へた先人の原因は之なりといふ人あるも我はこの心を愛す(その善悪は別として)。思ば駄弁を弄せしを謝す、今晚今井君出発、戸倉君を残して予科実科の諸君全部出動中なり。(秋水)

五月二十九日 “Es ist sehr kalt.”

朝から間断なく雨が降り、予科生の出動を重ねて舎内閑散の呈、午後は寒いので小生始め数名昼寝をする、夕食時三人程しか揃はなかつた。此頃ともすれば朝夕全部が揃ふのが稀であるが成可く一緒に食べて団欒を俱にしたいものだ。(辻)

五月三十日 極めて静かなり、聞ゆるは蛙声のみ、ゲートルは曾って閑静に智慧を生ずといへり、喧噪なる包圍にありて健全なる思想の生ぜん事を望むは木に縁りて魚を求むるよりも難かるべし。

五月三十一日 変わったことなし。

六月一日 晴天 河村君の弟来らる、気の毒にも家が焼けてしまったとのこと。

夕食後、舎生一同(僅か九人)で倒木の始末をなす。

朝、中津君雨龍へ出発、小母さん寝らる。

六月二日 兼坂、山本それぞれ故郷へ、これで舎生七人、夜は実に淋しい。

六月三日 日曜なれど外に雨、出る気もしない、辻、栗山へ、これで舎生僅かに五人。

河村兄弟二時の汽車にて小樽へ、駅まで送る。舎内ひっそりとして終日人なきが如し。

六月四日 朝、山本帰舎

六月五日 変わったことなし、配給がよかつたとかで夕食の量多し。

六月六日 快適に晴れたが風がある。何となく静まりかへった寄宿舎の此頃は淋しい。

六月七日 三村さんから葉書来る。七月までには帰るとのこと、山本が神経衰弱気味で寝られないとか、夜は蛙声のみ聞える、実に静かである。(草地)

六月八日 大詔奉戴日 山本朝帰り、素行云々する勿れ。

天気よし、中津より便りあり。

六月九日 村上氏帰省

六月十日 兼坂氏、豊平組パーティーに藤の沢まで、夜十時頃帰舎。

村上氏九時半帰舎、全舎生会合し宴会を開催す。

農学部明日より試験

六月十一日 なほちゃんアルバイトに出動。

小母さんは暖いと駄目になるさうだ。

曇で小母さん子供にすまないのかねぎの移植に大童とは親心。

兼坂氏定山溪の友のところへ、夜おそく帰舎。

山本氏青酸加里毒殺を企つ、但し相手はねづみ。

六月十二日 快晴、村上氏夕暮方アルバイト、草地氏薪割り

約一ヶ月の予定で小杉氏帰省、無事を祈る

防空要員の必要痛感す、青酸加里毒殺六割成功。

随分と気候も良くなりましたから七月になったらバートか石狩あたりへでもパーティーは如何といふ案を提出、要するに経済の問題であるさうな。

六月十三日 久し振りに初夏らしい気運が横溢、思はず我々をして散策の挙に奮はしむ、かの艶なる緑、我等の心、又彼と共に溶けなむ。

「春のくれ方のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家のおくふかく、木立ものふりて庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆おろして、さびしげなるに、東にむきて妻戸よきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げな

る男の、とし廿ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなるさまにて、机の上の文くりひろげて見たり、いかなる人なりけん。たづね聞かまほし」

とは彼の兼好法師が書にも見えたり、又我等の心、此に近きものならん (辻)

六月十四日 午前中晴れたるも午後より雨となる。小生床につき本などよみ、午後を無為に過しぬ、為さんとして行動の伴はぬ焦立たしき、異状に神経たかぶる、夜舎内静まりかへり、聞ゆるは滴声、蛙声、電車の音のみ、北野兄に手紙などかき再び床につく。

六月十五日 快晴、札幌神社の祭典にふさはしき快適なる日なり。赤飯をたらふく食べて、目の保養にと十河君(朝、休暇にて来舎)と出かけたる、流石に例年に較べて人少く若き者の少きが淋しきなりと二時頃帰舎するも舎生各々の所へ出かけ、舎空しく云はんかたなき静寂なりき。

六月十六日 天気晴朗なり、紅紫褪め、雨濛々として牧草のびて数寸、正に是れ花落江隄簇暖烟、雨餘草色退相連なるもの、加ふるに、たんぼゝの花到る処に簇生し■を散し、翠を延べ石狩の平原汇として大新氈を敷けるが如し、豊平の清流は嘈轟として白布斜に樹林の間に隠見し、仰げば紅躑躅、蝦夷松相間りて岩角を点綴し、郭公の之に鳴き、俯せば山脚深く陥りて溪水〇〇なり の夏の景、友に誘引せられ丸山に到りて見しものなり。

六月十七日 今井君アルバイト先より帰舎。其他変わったことなし。

六月十八日 変わったことなし。

六月十九日 朝より寒く破天荒なり、夕食後ピンポンする者あり。

六月二十日 昨日と同じく寒し、夕食珍らしく全員そろふ、畑の方は山本君にまかせきりは済まないと思ひつゝもどうも“おつくう”で手が出ない。草も生えて居る様だが……すべきことが多くて、こんな時勢になってはあまりにもなすべきことが多くてこまる。第一に遊ばなくてはならないから？

……決算を石川君となす。

六月二十一日 憂鬱な日である、変わったことなし。河瀬君朝石狩へ出かけ夕帰る。

六月二十二日 久し振りによい天気、気分がのびのびする。薪割などを少ししてみた。ひまなときをみて少しづゝでも薪を割っておいて戴きたいものです。今年の冬のたきつけは皆無ですから今から割って干して居かないと乾燥も充分に出来ないことになることを恐れます。夕食一同揃ひ、河瀬副舎長中心に支笏湖行、寄宿舎運営について相談す、後ピンポンをなす。

／以下『庶務日誌』から抜粋転載／ <現在の在舎生>

二十年六月二十二日 庶務日誌ハ長い間途絶エテキタ。コヽニ之ヲ復活シ重要ナル事項ヲ折ニツレ書き続ケントス。現在在舎生左ノ如シ

三村拓生(工・機三 帰省中)

田崎光栄(工・電二 勤労働員出勤中)

北野 康(前副舎長 理一甲 アルバイト)

河瀬 登(医一甲 現副舎長)

河村宏一(工・機一甲 帰省中)

石川夏生(工・機一甲)

草地良作(医一甲)

小杉孝蔵(農・林一甲) 帰省

村上 宏(医一甲)

兼坂専市(工・機一乙)

山本雄二(工・電一乙)

辻 利男(農・畜二・一乙)

平 巖(予医二 アルバイト)

石田茂張(予医二 アルバイト)

戸倉亮三（予医・二 帰省）
今井俊彦（予理・二）
中津正美（農林専一・アルバイト）
十河 昭（農林専二 アルバイト）
増田篤男（予理・一 アルバイト）
清水 和（工・専一 アルバイト）

以上二十名 中現在在舎生八名

舎生ノアルバイト出動ニトモナヒ舎ノ役員ヲ本日左ノ通り定ム。

- 一 副舎長 河瀬 登
- 二 会計委員 草地良作
- 三 労務部長 村上宏（主に畑の仕事）
- 四 戦時生活部長 山本雄二（防空・配給・衛生・文芸）
- 五 防空係員 河瀬登 村上 草地 山本 辻／以上『庶務日誌』6月22日記録を転載／

六月二十三日 今日も雨、小生村上君と石狩に鱒たべにゆく、舎に変わったことなき模様

六月二十四日 鱒腹鱒を食べて十二時二十分のバスにて帰札す、雨降り風があったが、浜辺の散歩はよいものであった。雨降りにて舎生皆外に出なかった模様なり、石狩の宿屋で何故か三村さんと医学部某教授と宮部先生の夢をみた。それから河村の夢も……

六月二十五日 久し振りによく晴れ、暑さを身におぼゆ、変わったことなし。

六月二十六日 午前二時頃突如として警戒警報発令、B29一機、津軽海面より本道侵入函館、室蘭、札幌、小樽を通過脱去せり。

八時頃戸倉君帰舎、元気な顔をみせてくれる、

十時半頃、北野、河村両君思ひがけなく帰舎さる、むかふの空襲状況など色々聞き日本もいよ※※の感深し、快適に晴れて夏にふさはしき日。

六月二十七日 十時半頃空襲警報が出る。不要食器などを埋めたりする。

六月二十八日 一時頃又もやBさん来道、晴れた北海道の空を散歩とはシャレてゐる。

六月二十九日 晴れて気持よい、十一時頃、空襲警報室蘭に投弾したらしい。

夕、“丹下左膳”を見にゆく者あり。 小杉君帰舎

六月三十日 一時頃B29来訪、室蘭のみ投弾なし、

石田君腰をいたためて休養中を来札さる、色々現場作業の様子を聞く。

清水君夜帰舎

七月一日 快晴、誠によい天気だ、これで幾分農家もたすかると思ふ。

午前、午後の二組に別れてアルバイトをした。

兼坂、山本、明日の試験に猛勉(本当かな)。

久し振りにB29君今日はやって来ない、一寸淋しい感がした。

明日あたりは来道するだらう、何時でも来い、大いに歓迎してやるぞ。

石田君帰省する。

七月二日 全員夕方菜の移植をす。夜、映画に行く（丹下左膳）

今井氏帰舎す

七月三日 <真の恋愛ある所、語ることなからん>

朝九時、作業の為津別に出発されぬ、余は君が世界観、人生観の転換あらむ事を祈りて別れを述べぬ。

医学部の一甲は本日廊下の取壊し作業なり、自らの校舎を自らこはすかなしみはあれど我等青年はいたく破壊を喜ばば、仕事ははかどりにて昼迄に終りぬ。

帰舎して後、懶隨に時を送りて疲をいやしたれば、早や夕食の柝ものうげに鳴りぬ。

夕食後、舎生一同相集りて懇和の中に舎の生活につき会合す

曰く、音曲は六時以後はつゝしむべきこと。

曰く、門限を十一時にする事
曰く、作業に協力すべきことを
副舎長より注意せられたり。
続いて又工学部の諸氏アルバイト出勤の為役員の改変ありぬ。

庶務 北野君 (配給事務を兼ね)
全 河村君 (" ")
全 石川君
生活部 山本君
勤労部 余、及草地君

而して又飯田君への舎生の個人紹介ありて終りぬ。
余輩思へらく

舎の生活は舎の空気への完全なる同化によりて初る、この気風たるや各舎生の平均気分たるに非ずして青年寄宿舎創立以来四十年を流るゝ禁酒禁煙を表象とせる宮部先生の青年への御期待に培れたる質樸醇美、温良高潔の気風なり。

そは徒なる空論を忌み、高く和して自らの生活を最も白熱的に發揮し、自らの生活を高きに持して相互に敬愛ある所の情熱ある而も散漫ならざる友情なり。

余輩思へらく、労働は天務にして舎へのアルバイトは舎への報恩なり、瞑々の中に舎への作業する舎生の諸兄を如何に尊敬せしならむ。

知られざる陰徳は人をして感動せしむ、舎の陰徳の有難きとなし難きを舎生活一年にして漸く感じ得たり、鈍といふべし。

余は如何に巧妙に語を継ぎ相語るも人道上相互に磨きあふべき友にあらざるよりは、尊敬し難かるべし。

舎は倶楽部にあらず、厳正なる人生道場なり、徒に騒音をなして、わめきあはんよりは、自ら高きを思ふべき也。

近頃、恋愛を語るもの流行す、されど真の恋愛ある所、語ることなからん。又真の恋愛は相互に相高潔なる男女のみ、よくする所にして、余は獸欲の変形ならむ、もし真の恋愛は吾人の品性の高潔を欲せざるべからざるなり、以上の事、我が思ふ事のみにあらず。

舎の先輩たる諸兄の訓へをうけつゝ思ひたる事、又教へられし事なり、自らをかへりみつつ慚きに堪へざれどもあへて書く也、余の寄宿舎生活に欲する事

一、勉強するが本態にして勉強を故意に軽んずるの風をさけるべきこと。

一、談論風発、議論に熱中し、その為に毎日書を読み、思ひをこらし、而もその議論の長時間にわたらざること。(村上記)

七月四日 <学生生活の幸福さ>

私が突然、寄宿舎に帰って来ましたのはもう先月の二十六日、八日程も経ってしまひました。

此の間に於ける私は唯、嬉しさの為に、唯、心の底からモゾモゾする楽しさの為に一人でうれしがって居りました。二ヶ月余の離舎が私に何ををしへたか？

二ヶ月余の離舎は又、学問からも離れた日月であった。そして、それは過去のものとして葬ってしまふには余りに現実性が濃すぎる過去では有る。何故とならば、何れ又近い内に私はその生活に帰って行かねばならぬのであるから。思へば横須賀での生活は大いなる経験では有った。然し又、あの生活に帰り行くと思へば暗膽たる気持……之が本音である。でも私は今幸福である。学生として講義をきゝ学生として生活できるんだもの。あの生活が私に教へてくれたものは、

第一に、私は舎の生活を送った。他人の間での生活には馴れてゐる。之は自分でもそう考へた事であった。然し、横須賀の生活をみて先ず感じた、寄宿舎の生活は、余りにも楽しく豊かな幸福な生活であると云ふ事である。感謝する生活、私は札幌でもし又生活が送れ

たらいくら感謝してもしすぎる事がないと考へた。
夢の様に偶然に今札幌に帰って、私は感謝と幸福で胸が一杯で有る。
電気が切れてまっくらな夜。あちらで、こちらで、だべる。

七月五日 何れ近日中に又横須賀に帰り工員となる私が学校の講義をきゝ、後れた分のノートをみるのを友人は不思議がってゐる、遊べと云ふ。

然し私は又もう二ヶ月前の自分に帰りかけてゐる、横須賀の生活は私に学問への決心の上で、失望を怠惰さとそして仕方ないと云ったあきらめをうえつけた。然し私は今寧ろ、このまゝ一年間も学校で勉強出来る様な気持になりつゝある。

私の将来なすべき学問の分野の余りにもゆがめられたせまさを身を持って体験し、失望した私と、そして学問といふ事からむりやり離れんとする私の心は又、一途の光を、学問に対する情熱の光をみつけ出した様な気持がするのです。やっぱり一生勉強はやって行き度いと考へてゐるものです。

今夜も電気つかず、こうなるとそろそろ神経をいためる様で、今日は査閲。

七月六日 電気がついた。

本をよんでゐたら思ふのは、横須賀の生活と学問と云ふ事である。反省の機会にめぐまれた私は今度向ふへ行ったら、じっくり考へて行つた計画の下に今迄の生活を基に生活しようと思つてゐます。

学生が今こうして学生らしい生活をしてゐる、之は北大生だけではないでしょうか。

吾々は余りにも幸すぎると思ふのです。

東京の学生を目のあたりみた私はそう思ひます、そして私は此の頃つく※※崇さが足りないと思ひます。吾々に甘い生活は絶対禁物と思ひます。真剣な（……正しい厳しさの土台の上に立つた真剣さ）生活を送る事に対して吾々はもっと※※※積極的にして然も反省的でなければいけないと思ひます。

吾々はもっと心を開いて吾々の心を開いて吾々の生活を反省し合ひ、語り合ひ、談じ合ふ機会と勇気が必要かと思ひます。すまない気持……之をもっともっと強く、深く、勇敢につきつめて考へようではありませんか？ 乱筆多謝 北野記

七月七日 雨（土）

帰舎するや否や友達から借りた空気銃を持出して雀をねらふ。併し一羽のみ、これも我が腕によれるにあらず、射撃の困難をつくづく思ふ。B29の落ちぬ訳も分つた様な気がする。夕食後、舎生総出で懸案の枯れた大木を倒す。どっちに倒れるか等わいわいしている中に幸いにも予定の方向に豪快なる地響と共に倒る、快哉なり。

七月八日 雨（日）大詔奉戴日

日曜と云ふに朝からばかに賑かだと思つて起きて見ると、山本君の御帰省であつた。

羨しきことなりき、ひねもす雀をねらひ無為なりき。

〇〇嬉しい。

七月九日 曇後晴（日）

朝、中津君帰舎される、昼頃又もB29一機来る、どうも頭上を〇〇〇〇〇 [文字うすくて読めず] 空襲警報ならなかつた様だ、危険々々。夕食会食す。珍しき白米の御飯なりき。

食後I氏アルバイト、胡桃の枝を下す。河村氏舎弟来舎さる。二十三時頃警報 石田記

七月十日（火）

小供が仔犬をかこんで遊んでゐる。山本のひろつてきた犬である。生れたばかりで、目もよく見えないらしく、抱いてやると、乳を探すのか服の内にもぐりこまうとする、膝の上でもがく様子を見つめてゐると、唯単なる生の塊、本能の権化にも等しいこの仔犬がとてもいぢらしくなる。

——いかにぞや汝父に悪まれたるか、母に疎まれたるか、父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。たゞこれ天にして汝の性の拙きに泣け……と捨子に書いた芭蕉の名文を思ひ出す。

七月十一日 だんだん畠の豆のつるがのびて行く、まるで自然の意志を象徴するが如くに、太陽の恩恵を誇示するかのやうに、自然は実に強力なものである。つい先日空襲に遇ひ、荒廢した焼あとの瓦灰の間より、陽光を求めて雄々しくのびて行く雑草を見ると、人間のいとなみの如何にはかなきか、自然の意志の如何に強烈なるかと嘆ぜざるを得ない。

これは東京の焼跡にたゞづんで得た最も感銘深かったことである。

七月十二日 どうしてこう今年は天氣が悪いのだらう。今年の作物が気にかゝる。

七月十三日 朝四時に起きる。寒いのに驚く。

七月十四日 空襲！！空襲！！空襲！！

七月十五日 朝五時頃より警報で起される。

小生小樽に在り駆逐艦と敵機との一騎打をみた、敵機の墜落して行くのを見て快哉をさげただけれど、ふと敵機に乗っている敵操縦士の事を考へたら変な気の毒のやうな気がした。東洋の北海道の小さなきたない小樽の港の小さい駆逐艦に打ち落されて行く操縦士の運命といふやうなもの、歴史などにはのこらない小さい運命といふやうなものを考へてみた。

七月十六日 小樽より札幌へ 途中軽川のガソリントラックの残骸をみた。又朝里駅の近所の汽船の沈没しているところをみた、撃墜敵機は二十機位だと思つたが、あまりにつり合はない戦争のやうな気がした。

七月十七日 楡林緑陰濃しと雖も気温低冷にして夏は何処にかあり、今秋天の試練北海の地に加はるを恐る、稲苗育たざれば則ち神州危ふし、古、千早ふる神きこしめせ田植うたてふ句もて天より慈雨賜りたる俳人あり、天再び我に夏日の熱気を賜はらん事を、然らば神州を冠せる西夷を滅す事早からん ■ 艸

七月十八日 曇 今日も相変らず天氣が悪い、一体夏は何処へ行ってしまったのだらう、俺も天氣に負けず氣持が暗い、何故だかわからない、動きたくなければ、人と語りたくもない、こんな時大口あけた馬鹿笑でもしたらそんな氣持なんて吹きとんでしまふのではないかと思ふ、だが俺とそんな話をしやうなんて物好もみない、第一語りたくない、昨晚も何処からか大きな笑ひ声が聞へて来た、陽気な人間がうらやましい様な氣もする、同じ一生なら笑って活す方が得だとはよくいはれて来たが俺には出来ないんだ。何故だらう、俺にはわからない、今日考へるでもなし、考えないでもなしぼんやり道を歩いてみたら、五つ六つの女の子が“おぢちゃん”とよんで俺の後をついて来た、ふり返って“なあに”と言って返事をしてやった。俺の様な何時でもしかめ面をしている人間の何処がよくて声をかけるのか、時々声をかけられる事がある、馬鹿真面目なのがいいのか、とにかくそんな時には、児供はかわいらしいと思ふ、然し、汽車、電車の中で赤坊の泣く声を聞くと之程いやらしい“物”はないと思ふ、勝手なものだ。

七月十九日 木曜 < 寄宿舍は修養道場 >

(現在の私の氣持) 河瀬

身不肖にして宮部先生の御任命を受け副舎長の任を拝してよりここに二月余任務の重大と自らの力の足らざるを痛感しつゝ、ここに現在寄宿舍に於ける私の氣持を述べさせて頂くことにします。

寄宿舍は私達舎生にとって温き家庭であり、同時に厳肅なる修養道場であります、この二つの面を十分に生かして行くことこそ私達の寄宿舍生活でなければならぬと思ひます。第一に寄宿舍は全舎生にとって温き我家であらねばなりません。而して舎生全員は、お互いに兄弟として楽しい生活、団欒の生活、憩ひの生活を送りたいと思ひます。現状を見るに、舎は凡ね円満と云へませう、然し充分とは云へないと思ひます、もし舎の中に一人でもボツンと仲間はずれな生活をしてゐる人があつてはならないと思ひます。舎生各位は夫々舎の全員と親しく交はる様心掛けるやうにしたいものと思ひます、舎生僅かに二十名、グルッペ、グルッペで固まることなく、お互ひに勝手に何処の部屋へでも入り、駄弁り、エッサンし、議論するやうにつとめませう、寄宿舍を全舎生にとって楽しい所、憩ひの所と致しませう。

第二に寄宿舎は修養道場であります、そこには無言の中に守らるべき規則があり、自らなる舎への奉仕がなければならぬと思ひます。この点に関し私達は現在舎生の中に多くの立派な実行者、模範を見出します、黙々として畑を耕し、自ら進んでアルバイトに従事し、積極的に舎の改善に努力し、又内面的には静かに書を読み、勉学に努め以て伝統ある寄宿舎の美風を益々培ひ、発展させて行ってくれる人々、これらの人に対し私は心から感謝尊敬を捧げると同時に深く自ら省み恥じてゐる次第です。もし寄宿舎を以て単なる憩ひの所と考へてゐる人があつたら、これから改めませう、寄宿舎は積極的修養の所です。寄宿舎生活への積極的同化、舎への積極的奉仕、又内面的には自ら求むるものへ向つての努力精進、かくして澁澗たる修養の生活が行はれるであります。

之らの諸点に関しては自ら省みて誠に忸怩なるものがあります。宮部先生の膝下にみんなそろつて真に立派な舎生活を醸成して行きませう。

之を要するに舎生活への積極的同化をお願いする次第です。 一河瀬 登一

七月二十日 ここ数日来、敵襲をみない、たまには来てくれないと、退屈してしまふ。

本日、夕食後、三号室にて決算を行ふ、一日食費五七銭、集るもの北野、草地、村上、河瀬

河村君昨日より感冒、今夜九時しらべたら **korperliche temperature 38° 6 puls**

108/minut kopfach...y 早くよくなつてくれゝばよいが…。 河瀬記

七月三十一日 曇後雨(土) <舎も一つの社会>

漬物一樽三十五円七十銭(草地さんと共に)

此処に於ける舎生活二十一日を過ごし“なれて来た”と云ふ感が私の心に起させるやうになつた。これはつまり“なれる事それ自身”は七月十九日の日記に書カレテアル如ク私自身の舎への同一化、換言すれば、私世活の一切の舎への帰一そのものゝ一面である。

“紅に交はれば赤くなる”古人の名言である、不肖私一個の人間に対し舎の先輩諸兄の与へて下さる色種は多様である事必然である。私はこゝに先輩諸兄の優秀性を自ら摂取せん事に努めんとする者であるが諸兄も何事にも浅薄未熟なる私奴に対し、諸兄の具有せらるゝ先天的才能や高点的才能、スグレタル手腕、長所等ヲお与へ下さるに積極的ならん事を希望する次第である。

舎は一つの団体である。と共に一つの個人である。個人の集合体は団体ではあるが、その総体は又一個人と見るべきである、そしてこれは舎を広めて国家の社会性とこそこれを呼び得るならば前者を舎社会性と呼んでさしつかへなからう。つまり舎も一つの社会である、我々舎生にとって、この舎生活の円滑なる運行は闘争社会生活の勝利に等しい。この小さな社会一舎を致知する事は少くとも舎生活への勝利である。舎生活への勝利は、更に複雑矛盾せる社会生活への勝利に導くところのものである。

心と魂の結合は人間社会性の統一である。

優秀なる人間的社會性は人間性を構成する材料と構築せしむべき酵素の先天的優位性(血統的要素)のみに止らず外的要素の持寄り財産なる教育に自由性を包含せしめ有効に自己構築の酵母の一部たらしめるところにある。これ、心と魂の統合、統一即“なれることそれ自身”である。世の多くの偉人英雄が吾人に常に云ひしところの言葉、私が私自身に対して常に言ふところの言葉は

君は君の力を信じ給へ。

君は自己のなんたるかを知り給へ。

君は君が人間会に於て如何なる位置にて如何なる時に自己のあらゆる才能と他の凡てもその力の価値を認識するかを考へ給へ。君よ、君は自己の魂や心や力を現実に強く行き抜くものに使ひ給へ。

君は常に社会に於ての人間的勝利者になるやう努力し給へ。

■ 夜十二時就寝前のひとゝき 飯田記

七月二十九日(日曜) 今日草地、村上両氏、而して飯田君、兄様の処へ出かけ舎に残る

は河瀬、河村、小杉、山本、北野の五名、十時頃迄アルバイトして塩アンのオハギ満腹、うらめし相な顔してオハギとながめるのは満腹の果の事であった。夜、草地、村上兄帰舎、エッセン又々あり、大いに今日一日は食って満足、誰かお腹をこはさねば良いがなあと思ふ、外に変わった事なし。

飯田君の言葉“社会に於いての人間の勝利”私には何だか判然としない、どうも何度よんでも判然とせぬ。“舎生活の円滑なる運行は闘争…”はどうも余り好きな言葉ではない。なぜなら吾々には未だピント来ない言葉で有る様だからである。こわいような言葉である。私はかう考えてゐる。

血闘を目前にひかえた吾々学徒が最後の一瞬に於いて崇く死んで行く事が出来る様な……丁度特攻隊の勇士が今迄に少くとも吾々に示してくれた様な崇さを行く手の灯として平凡にでも良い、真面目に自己と云ふ物の中にくひ下って行く……つまり帰一すれば“死”即“生”……こんな所に学徒全部が歩み行く過程の中途に同じ屋根の下にすんで行くんだ……とまあ考へてゐるのです。此れ以上は書き度く有りません。

私は近頃の自分をみてつくづくこんな事を考へました。“飛行機が来るかもしれん”とか何とか彼とか理くつつけてさぼる自分をべんめいしようとし、怠惰な自分の生活から反省といふ因子を消そうとする自分がヒキョウだと思へました。結局文句言つて勉強しないのは自分が弱くどこかに大きなゴマカシ——決してふれたくない様な——があるからだと思ひました。まるで二重にも三重にもとりまいたズーと外から物にさわる様な気持でふれない様にして過す自分の浅はかさ、特攻隊の勇士も吾々と同じ学生であった。彼も人の子、吾々は余りにも安易にすぎではなまいか。

私はもっと勇敢に、真面目に苦しみ乍ら生きて行き度いと思ふのである。乱文 北野

七月三十日 暑し、変わったことなし。

七月三十一日 蟬の声を聞き漸く真夏が来た感じがする。河瀬副舎長帰省、B29 函館を偵察。

八月一日 本日より外食券制度となる。中継期として五日まで舎で昼食を出す。下宿者がスルメ一枚、きゅうり二本で昼食を済ませて居るのを思ひ感謝の念にたえず。

八月二日 <今年の秋の食糧問題>

今が一番苦しい時でせうが今年の秋も決して食糧問題は緩和されなと思ひます、困つてからでは遅いのであつて、困らないうちに対策を考慮しなければならなと思ひます、ただ漫然と秋の収穫を期待してゐても例年の様なわけにはゆかないと思ひます。それと去年の冬の小母さんの苦勞を思ひ出して薪の用意をしたいと思ひます。今の時代に大きな感情の中に生きてゆかなくては到底たえられるものではありません、個人的感情より舎全体の感情に、より大きく国家的感情に生きるべきものだと思ひます。傍觀的態度はもっとも排さるべきものだと思ひます、習慣的な安易な墮落した生活から抜け切らなければならなと思ひます、言ふは易く行ふは難し、何も言ふ必要なくただ行へばよい。 北野君理学部宿直

八月三日 非常に暑い、今年は夏らしい日もなく過すのかと思ひしにこの近日は、真夏にふさわしい気候である。軀も非常にだるい、夜は寝苦しい、然し、戦地ではこれ以上の暑さの中にももくもくとして軍務に励んで居られる将兵をしのぶ時、ただ頭が下る、こればかりでへこたれてはならない、と痛感する。秋の収穫への農校作業も相当進んだけりがつき次第薪の方をするつもりです。飯田君帰省。

八月四日 今日也非常に暑い、南瓜や胡瓜がめっきりのびてゆく様です。茄子もトマトもそろそろ果実をつける頃でせう。

毎日々々畑の開墾は御苦勞様に思ひます。

然し、寄宿舎の周囲に利用され、生かされてゐない一寸の土地も見なくなる迄御協力下さ

る様、勤労部としてお願いします。

今日、河村君の御尊父と御母堂が見えられました。

寄宿舎としても少し大きな防空壕が要るのではないかと痛感しますが、諸兄の御意見は如何ですか 村上

八月五日 (日) 蒸釜の暑さで勤勉なる諸兄もあるひは豚の如く眠りこけ、昼船に平安の夢眠る人の数こそ本当の顔である、本当に暑い、小母さんもアップパと日本語にて称する簡単着のため、その肥満の体躯が白日にさらされ、頭脳兎に角も敏活を飲く、食欲存外敏にして眠りに次ぐは豚の如く喰ふ所作なり、夢中に夢見る心地にて、左の(み)まとまりたる勉強成果なし、こんな天気良い日曜には散歩にて円山当りに春の馬鹿夢を追ふ雌と雄の群を樹間に眺むるがよし、あるひは、只大掃除せる煙筒の如く甚だつまらぬ面らでじろじろみる猥女あり、あるひは、青き表紙の書を朗読して淫声を以て聖域を乱歩ふらち女あり。妙な山帽子かぶりてニッカーはきて不貞くされたる狼の如き不良青年あり、願はくはかゝる不良青年の群と玉石混ぜられぬ様よろしく山容のみを見る風情を保つべし、舎内も俗息ありと堪えざらむかたは一日山に籠るはゆかしきことなり。

砂川作業の聖戦士石田、平岡君突然休暇を得て寄宿に戻り、玄人はだしの逞ましき日焼せる膚に奮斗を物語り、のんびんだらりと勉強することの如何に時瀬に背くかを見せつけらる。ただし大分子科生の本質的色彩あせたる模様にて如何につかれたとはいへ内的なるファイトの表現を欲しかった。

もともと一寸ばかり借りて来た猫の感なきにしもあらず、全舎を挙げて労をねぎらふ意味にて夜、愉快に一室に娯楽す、但し、エッセンは石田のいり豆にて、不美味なる紅茶にて我慢す。

夜更けて興更につきず、最後に花火をやって寝につく。草地氏やゝ消耗。

一、主食糧配給を受け、一〇〇日分の外食券を受く

二、河セ氏二十二時帰舎、エッセン豊富なり。

三、清水一瞬間帰舎、将に飢えたり、折角の心尽しも食わずに帰寮す。

四、絵画展覧会開催することに予定す。

五、アルバイトに関し更に積極的策を望む。

六、「楓林」第二号出版するも可なりや、但し内容は真夏の夜の夢の如きまとまらぬものにて、むしろ奇抜を可とす、たゞたゞインスピレーションの豊かなるもの、微苦笑をもって生活の源を与ふるごとき新鮮なるもの

八月六日 (月) 陽未だ出でざるに、石田、平、散策以て天地の靈氣にふれむとす。感心なる現象にして流石は予科生の万葉調を持って立派なものだ、近頃天気が良くて、大気ははなはだ塵埃立ち込め新鮮なる空気はかゝる朝にのみふるゝを得ることを彼等は本能的に知るならん？ 飯田帰舎す、外食券の第一日は如何なるや、愚輩未だ使用せず、正に吾が生命の進退のかゝれる重大事なり、と思へば胸のときめきあり。さるにても素人はだしの？ 園丁ばらの作るところは、やせ唐黍、あだ花もつかぬ南瓜か？

然らず、みよ、靈氣に感応して立込めるもやの如くもやもやとのびたるは、村上氏のたうきび、河村氏のみめ、河セ氏の唐きびに到りて太陽も唾然としてその責を回避せりとなんきこえし。

アルバイト部は、この現状をそのまゝにするや、高がしれたるこの土地に出来る高の知れた作物にて冬をすごすつもりなりや、何か良作はなきや、行く末考へ春の“餓鬼”ばかり集りたる慄然たる光景想像し得ざるや、村上氏といはず一同の智之を求む。

時は水の如く流れ、現実には白刃もて頭上にあり、迅速なる対策を求む。北野氏猛勉、曉を覚ゆるもあたかも狸につかれたる人の如し、学徒かくあるべし。いゝか減なる自己陶醉や自己満足の臆病なる生活は改むべし、又敗戦気分をかもす如き雑言を吐く者の少くも舎の中のみでもなくなる様心掛くべしと思はる。予科生猛然アルバイトまことに逞し、たのもし。

八月七日（火） 石川氏帰舎、丸三日を費したりと、御苦労さまなり、河セ氏、平、石田、飯田氏らアルバイト、北野氏作業に関し友達と打合せのため夜遅し、夜のにしんは冷凍魚にして案外新鮮好佳なり、小母さんねいもうに畠をやられる。舎生もって範とすべし。

八月八日 <特攻批判、ニヒリズム批判、学に帰るべし>

大詔奉戴日。広島市新型爆弾の餌食と化す。北野氏の解説「B29一機よく艦爆二千機の能力発揮す」と。憂苦又起る。

これで、防空壕の現在迄の型の無効なるを知り、その手の渋るを恐る。

石田氏朝アルバイト。八時三十分より工学部北側にて証書奉読式あり、“時の到るを静かに待つ”の訓示、真、意味深遠にして熟考深省もって学生生活のあるべき姿を把えざるべからず。「静かに待つ」なる言、千鈞の重味あり。過激不規律の勉学不可なり、奔放不羈も不可なり。如何なれば、二十幾春秋の生命培ひし大自然（勿論あらゆる人をも含む）の恩恵に許されたる生命もて報ひんかの道を、自然なる、超躍なき自然の姿のまゝに考へ行ふものと信ず。只一度の特攻よく一瞬にして国恩に報ゆるに足ると考ふるは早計至極、僭越至極。更に真剣に一点の茶化したる不真面目な考、ニヒリズムミクな考なしに死生観を築きあげる着実な生活こそが“静かに待つ”態度と思ふ。塵濛々たる周章狼狽の世俗より今こそ超脱、本質的な“象牙の塔”に籠れる静寂を保つべきなり。学に帰るべし。余りに世俗化したる今こそ学に帰すべし、求むべきは真理のみ、国家奉仕の大野心、大清浄心のみ。

山本氏、漬物入手、河セ氏の今朝のこと、“非科学”のなせる業、恥づべきなり。

河セ氏肥料撒布。（七号）

八月九日（木） <勉学する本筋を忘れるはもっての外>

早朝より警報絶間なし、醜翼しきりに東北一帯をおびやかす。本道には来襲機なし、天気晴朗なれど一脈の暗雲漂ひて将に十七時、大本営発表はソ聯邦の対日宣戦、戦略行動の満ソ国境に開始されたるを告ぐ、帝国のこの事あるは予測中の確定事、ただ時の問題なりとは云へ、戦局に一大重圧を加ふるこの事実を我等学徒は如何に観、如何に処すべきなりや。墮落奔放、自我、我利“最後なり”との憶断により学徒にあるまじき不埒なる行動に出づるや。

最後迄美しく、今に培ひし理念を最高度に生かし、従容として国の命ある迄待つか、云はずもがな後者のみ、採るべき態度、そは人間たる事よりみるに辛し、されど学徒が事態の変化に流され落付いて勉学するの本筋を忘れるに至りてはもっての外なり、帝国二千六百年の光輝ある歴史を護るものは一人学徒のみ、思想的廢類は俗人の生き〇〇〇。然も狡猾にして外表美しく生きる様子をし、机に向ひておれど心あらぬ自我の念に駆られるはあり得べき事なれど、もっての外の事なり、人格の粹、今迄宇宙にも瀰漫せんの広き意志博愛の人はかゝる事態に臨みしに、一片の我利人に狭く陥りたらんには、真にその博愛の虚偽、人格の人を欺瞞せしものなれや明らかなり。人格はかゝる危急の時、人相扶け、冷静職を忠実に果すべきこと、その事により真価を發揮すべきもの、人生観は最後迄美しく不動たるべきなり。我等最後迄美しく生きんかな。少くとも舎内にて我利、自我本能に趨るの輩無からんことを祈る。又かゝる者万一現れたる時は、その者一日も舎内に留るべきにあらず。大らかに生きんかな、大自然の偉大な落付きに生きんかな。国家観念はあくまで純忠に散る己の美しさに結ぶべきなり。理屈にあらず。信念にてもつべきものと信ず。

八月十日（金）曇 忘れた。

八月十一日（土）

うすら寒き氣候なり、土地乾く。作物が気に掛る。

八月十二日（日）曇、雨

昨夜珍らしく雨降る、夜、河村、石川宿直で学校へ。

八月十三日（月）曇

夜廻り寄宿舎、村上氏の引率で兼坂君と暗黒街を行く、省みて寄宿舎の明きに驚く。

八月十四日（火） 午後、学徒隊検閲の予行、夜は又河村君と泊り。

終 戦

八月十五日（水）曇

天地万象涙滂沱として社前に土下座して、不忠の罪を詫びる。遂に聖断下さる。矛を収めて戦を閉ぢよと。あゝ只黙して深省、将来の日本を省察し、民族の行末をしみじみ考へる。

大君の みことに暮るゝ 今はたゞ
明日の日の出の 露となりとも

八月十六日（木）晴

寝苦しき一夜なりき、珍らしき晴天、聖断の天意に叶へるなるべし、我また何をか云はんや。

八月十七日（金） <教授は諦観的な瞳—科学的な使命に生きる強さを>

学徒やゝ静思の状態に入る。教授は諦観的な瞳に科学的な使命を依頼するの静かな感情を込めて講義をする。科学的使命に生きる強さこそ絶対必要である。“戦争”が生活上に一線を画するや否やはわからぬ、ただ将来に現出する現象に対する臆病な推測は、もうやめて確定的なものを把むべきだと思ふ。

夜、新旧とりまぜておいもの試食をやって、少し漫談をやる。

八月十八日（土）

晴天、変わったことなし。

八月十九日（日）

石田、平、中津、清水の諸君アルバイト先より帰舎。

一同会し、暫し漫談をやる。日昼暑く中島プールに泳ぎに行くものもありたり。

八月二十日（月）

晴天、今日に到って始めて頭の状態が正常にふくした感あり。

増田君十日の休暇を終わって勇躍アルバイト先へもどる。石田、平の両君帰省。

八月二十一日（土）

暑い！暑い！水を一升ばかり呑む。乾パン配給になる。

山本君のお母さん来舎、とまられる。

八月二十二日（水）

新聞によると二十六日より連合軍進駐開始とある。

あまりにも平穏な此頃である。教授の中には楽観論を吐くものあり。

兼坂君帰省

八月二十三日（木） 休戦の詔勅が下ってから已に九日を経過した。敗戦国家としてはあまりにも和やかな感じがする。街も明るく映画も本日から始めていた。早速河瀬さんと東宝へ、

ヤジ喜多道中を見に行行って来た。古い映画なので途中が大分抜けている。

帰り道には月が明るく照って涼しい気分がした。もうそろそろ秋といふ感じを身に受ける頃だらう。季節は容赦なく刻々と変って行く。それにつれて草木や鳥獣も遂に人間迄もが。

目前に迫って来るであらう人為的急変の風をはらんで。民族と民族との觸接、これが珍奇な恐怖の期待を以て。（飯田）

八月二十四日（金）晴

朝から非常に暑かった。

医学部一甲試験が十月五日より始まり、その為、九月五日より試験まで休みと決定、自分は自惚れの強い為か何でも「やれば出来る」と簡単に考へている。然し、実際に「やる事」

が難しい事でもあり、大切なことである。結局「やらなければ出来ない」のだといふ事を最近切実に感ずる。大東亜戦争が、このやうな結果に終るなどと考へた日本人があるだらうか。みんな頑張れば必ず勝つと信じてゐたらう。然し、全日本人が最善をつくしたか？

自分一人位ずぼらをしてゐても……と考へた人は少なくないと思はれる。いや本当に徹頭徹尾最善をつくしたと自ら断言し得る者が何人居るだらう。みんなが「頑張れば勝てる」と思つても結局、それを実際にやらなければだめである。

同じ事を私自身の勉強態度についても感ずる。私は「試験などは悠々とパスし得る能力がある」と自惚れてゐた。然し試験の時、悠々と過した事は未だ嘗つてない。いつも一夜づけの勉強で及落の巷をさまよふ。

目前に迫つた今度の試験も今になってあわてゝゐる。何事に於ても吾人は「やれば出来る」などといふ自惚れは持たない方がよい。先ず実行することである。そしてその事を完遂してから「努力したから出来た」といふ喜びを獲得すべきであらう。自惚れてばかり居る様な者は、結局いつも「やらなかったから出来なかった」といふ敗北者となり了るであらう。今後は何事に於ても先づ努力、先づ実行と自らを鞭打つ覚悟であります。

試験、帰省その他の関係で当分北野君が副舎長を代行して下さる事となる。

今薪切りをやっている。今年の冬のたきつけである。村上氏毎日学校から帰るや否や薪切りを始められるのには感謝、敬服の至り。(河瀬 記)

八月二十五日(土) 曇 <すべからく修養に努むべき>

内田清君除隊になり昨日来札、今夜来舎。

同君入隊当時の旧舎生集り談合す。初年兵古年兵の生活態度を聴く。それと現在の我々の学生生活の態度、又世の人々のそれを思ひ合せ、国家といふものは真に多種多様の人々を含んだものであるといふ事を泌々感ず。吾人、将来世に立つ時、人を指揮する立場に立つにしても、指揮される人となるにしても確たる精神、心がまへを把握してゐなければ人として立派な生活は送れない。吾等須らく修養に努むべきならん。

同君、特別室に河瀬と宿泊。(河瀬 記)

近頃、自分の名を忘れる者少からず、忘れないで記入する様願ひます。(河瀬)

八月二十六日 日曜日 曇後雨

朝から天気がよくない、近頃は日曜日でも退屈だ、等といふのはよくない事だが、勉強する程のファイトもない、それにしてもY氏前後二時間半オルガンを引続けた。その熱心さには敬服した。然し、隣の部屋はいい迷惑だ、名演奏が二時間半続くのだから

昔**dark Sunday**というレコードがあつた様に思ったが、今日は**musik Sunday**とでもいひたい、隣の部屋は何デシベル位か誰か測定してくれる人がないかしら。

昼はエッセン造りでいそがしい、おぼさんのみない日は何時も澱粉が活躍する、昼然り、又晩然り、明日も又? (秋水)

八月二十七日

兼坂君帰舎。同君の室にあつまりしばし駄弁る、飯田君熱三十八度八分。

八月二十八日

雨模様なるもむし暑い。B29が札幌上空を飛ぶ。十河君岩見沢に帰る。夜、河村君御持参の南瓜を煮て皆と食べる。(草地)

八月二十九日 赤とんぼ、澄んだ青空と、愈々札幌の秋を思はせる。

北野君とともに配給のじゃがいもをとりに行くに配給店に理学部戸谷助教授がかなりおなかの大きいフラウとともにいもをとりに来てゐた、教師は皆そうであるが、教壇に立つ教師は皆美しい言葉、鷹揚な動作何だが我々の感覚する世間以外のやうである。がいもをとりに来た戸谷さんを見ると案外我々よりもっともっと切実な生活を送つてゐるやうである。他の教師も皆同様であらうに、確かに教員とは社会の一階級を形成している罪深き人間どもの謂である。

八月三十日 北野、草地、河瀬、河村と我舎の顔役御招待に応じ図々しくも望月さんのフラウなる浜本さんにおしかける。

我々からみれば実に驚くべき精緻なる料理に久しぶりに味覚を満喫した。寄宿舎生活のボリウム主義のおかげで大分味覚が低下してゐるのかも知れないが、しかしなにしろ食生活

におけるイズムの相異だからしかたがない。
八月三十一日 北野、清水は南へ、草地、村上は北へ、各キンキジャクヤクとして帰途につく、四人の嬉しさうな顔、よろこびをもった顔は幸福な顔である、がしかしどこか隙のある顔である。掏摸のもっともよろこぶ顔だ相である。……と四人を送る途次こんな罪なことを考へてみた。

九月一日 朝、河瀬、山本君出発、いよいよ残り少なくなった。
夜もとても涼しくなった。窓のすぐ下に南瓜のつるがのびて大きな葉をしげらしてゐる、茄子畠を荒らし、ビートを覆ひ、我物顔にどこまでものびてくる。この畠のタイラントのおかげで茄子など甚だ出来が悪いやうである。畠にも**might is right**といふ言葉が通用出来さうである。

石田、今井君来る。 以上 河村 記

九月二日 <ミズリー艦上で無条件降伏の調印>

砂糖がまだ来ない一体どうしたんでせうねーと小母さんと台所で心配する、この日砂糖とは何の関係ないのであるが歴史的な無条件降伏の調印が東京湾ミズリー艦上で行はれた。帝国代表重光外相、梅津参謀総長、ふと映画でみたシンガポール陥落の時、白旗をかゝげ、地の底へでも歩いて行くやうな恰好で歩いて行くパーシバル一行の姿が浮んだ。アメリカ人も英人も支那人もオランダ人も黒人も映画でみるであろうこの東京湾上の状景を、我々が見るには人間万事塞翁が馬といふにはあまりにも切実すぎる、痛切すぎる悲惨な情景である。

(河村)

九月三日 <大学では防空壕の跡始末>

時に来て、ちょっとみんなの顔を見て何時の間にか消えて居なくなる様な生活が続いた、そして我々は舎のお客さん扱ひされる事が続いて来て、何だかじっくり落着かない、人の家に来た様で、借りて来た猫見たい顔をしてゐる事でせう。

みんなの居なくなった寄宿舍に来て退屈まぎれに学校に行つては防空壕の跡始末をやつてゐる、恐らく手廻しよくやつて置いて失敗した最たるものでせう。だから寄宿舍の某氏の如きが威張るのである。

九月四日 久し振りに身近に聞く電車の音に惰眠の夢を破られて早くから転輾として四方山の事を考へてみた。もう秋が来たのか、生温い寝床がなつかしい。

朝きらきら輝いた空も午前の中から薄曇り今年特有の降るでもなし、降らぬでもなしの天気となる。

夕方河村さん、あの体もてよく二十数人分の砂糖！！待望の砂糖を運び来たり、早速皆の喜ぶ顔を想像しつつ井に一杯づつ配給する。

九月五日 早朝爆音、米機と思ふが床にあつては到底見る事は出来ない。窓越しに梢の間でも通る時見えないかと、そんな虫のよい考へを起してみた。でも今日又防空壕の整理に登校する時、千米位のB29を始めて瞥見することが出来た。対空監視哨の高い所につくられてみたわけが分つた。

此の日議会では、保有せし軍艦、飛行機の数、軍需製産量を国民の前に暴露して止まなかつた。又宜しく以つて一億総懺悔すべき秋である。 (以上 石田)

九月六日 早朝、河村旭川へ、午後、石田支笏へ。

九月七日

九月八日

九月九日 石田帰舎

九月十日 午後五時小杉帰舎

九月十一日 深夜河村帰舎 十河来り直に帰る(食事ナシ)

九月十二日 B29低空飛行している。その巨大なることおどろくばかり。

午後、小杉、石川、河村、石炭運び、消耗す。朝十河帰舎、夜十一時頃戸倉君兄君復員の

途次立寄らる。朝、石川帰舎す。

九月十三日 快よき日の光、穏かな大気の膚ざはり、よい気分である。又もや石炭一ton八bu来る。昨日の三人が運搬していると、内田君が来り手伝ってくれた。毎日まるで石炭アルバイターの如く真黒である。

九月十四日 おばさんミーチャンをつれて小金井へお湯に入りに行く。

昼、鬼のみないうちに天ぷらをじゃぶじゃぶあげる。夕方、おばさん帰る。

九月十五日 夕方、飯田、草地、増田帰舎（夕食三名トモトラス）

九月十六日 夜兼板、帰舎

九月十七日 舎生大分帰って来た。山本午後三時帰舎する、段々にとぎやかになり、昔のなごやかな愉快的寮に帰る様だ。（兼板）

九月十八日 今日は朝から雨である。ひどく濡れて帰る。

今日は皿に山程もボタモチが当る。皆喜んで食った。八時過ぎ村上さん帰舎ボタモチのないのを見てガツカリ。

九月十九日 朝から晴れ渡ったよい天気である。全く秋らしくなった。

午後の汽車にて石田さん帰舎、小母さん角田へ、小杉君帰省。今夜は恐ろしい晩です。

内田君大肉塊一kan一〇〇meを仕入れられ、スキ焼会を実施、草地君の銀米三升ばかりで一同満腹、満舌。

九月二十日 昨夜の肉のあまりで朝から肉めしを満喫する。

朝、河瀬副舎長帰舎、平君支笏へ。夜決算をする。食費は一円余で珍しく高い。

九月二十一日 朝山本君帰省、中津君帰舎。

午後、十河君帰省、今日もお肉が配給で、天ぷら、又内田君寄贈の鮭。内田、兼板両氏手相を判ずる事権威のよし、胸に悩みのある方は、運命師氏に訪ねるが可ならん。

九月二十二日 平君帰る。又おはぎ、満腹。

夕方、河村、村上氏映画に行く。

九月二十三日 朝山本さん帰舎す

九月二十四日 憂鬱なる日曜日、朝十時頃、内田、河瀬両氏来り、吾輩の大切にしまっておいた葡萄糖を吾輩が一片をなめてゐる間に全部平げてしまった。四方山の話の落着く話は例の語、内田氏ウンチクを披瀝す。

九月25日 本日は、北大学部、及農林専門部の卒業式である。昼凄い雨が二時間程降った。

九月二十六日 夜食に南瓜と。

近頃必ず何処かの部屋で非公式宴会をやってみると思つたら、その宴会の餌たるや、全く非公式なる代物であるとか、おれもその中に入りたく思ふことしばしばである。

おれも満二十年以上の男だぜ。

九月二十七日 石田朝一寸見かけたきり何処か援農に行つてしまつたらしい、なんて無責任なことはかけません。今夜は特攻隊編制の中に入る積りであつたが、時間の都合上不参仕り申訳これなく恐る恐る非公式宴会にだけ参加申上候ところ、ごちごちの南瓜に、ごしごしの生にえ澱粉、全く、これを美味なりと称して豚の如くお食べなされ候ところの紳士淑々諸君の御面相つくつく不思議にながめつゝ、さりながらとやむにやまれず御相伴仕り候ところ、真夜中よりストマックエークなるもの起りさうにて、ほとんど困惑致し候。

河村氏小樽へ、内田、山本氏木炭の配給とりに、諸氏薪作り懸命にて河村氏の姿の見えざるは何か一沫の淋しさと安心のカクテルの如きものを覚ゆ。外食券都合により配付不可能。

九月二十八日 <舎の実情はやや無政府状態に近い>

河村氏御帰舎、小母さん頭痛、あわ飯をくってあわをくつたが、初物は七五日の延命とやら、しかし、この状態では七五日の縮命を暗示するともとれる。諸氏の食糧対策如何？

石川氏薪作り全く御熱心。個人の勉学以外に頭を費やさず、費ひやしても効なしとしてか、いい加減に命令を出し放して無責任な近頃の舎の実状は、やゝ無政府状態に近い。責任は全

舎生の雙肩に平等にかゝってゐる。全体のよりよき生活の対策は全舎生の民主的創意の積極性にまつ。舎生活、副舎長にすべての面に関し良策を具申する責任とそれだけの愛舎心がある筈だ。舎生活の結合はのんびりだらりの漫談ばかりから生れない、根基のぐらぐらした生活から何のファイトぞ、エネルギーぞ、反省してみたまへ、薪切りをさせるときは、させるやうに自分でファイトの原料なき人のことも考へて働らせるやうに仕向ける責任があり、その対策のために、必死になって腹のたしになるものでも集めてからかゝらせるのだ。精神力も肉体の束縛内にあることを知りたまへ、精神力だけでは薪は切れん！！副舎長の勉強で忙しいときは皆で助けるのだ、自由民主のはきちがへはみにくい。自分の鏡にうつった自己の晴姿に満足するまゝに家にこもってゐる自己陶醉者は、遂に自己の世界より知らず、人間に生れた本当の意味の一片も味はずに仕舞ふ。笑はれもせず、また一生笑ひもしない。笑つてもそれはインチキな人の気持を窺ふ下劣さのみがみえる。呵々。

なつてゆくやうにならせるという無責任な舎生は、一日も舎内にとゞまることは良心が許さない筈だ。みにくい、へっぽこ社交はやめたまへ、そして寸前に迫る現実を、勉強に熱した頭を一寸あげて凝視し給へ、何と我等の生活は危いことよ。第一が食生活だ。非公式宴会も永續性はない。第一舎の雰囲気が減茶苦茶だ。規律が減茶苦茶だ。たゞ従来のしきたりに従へとは云はん、更に慙新な時代意気に適合した舎生活、然も先の見通しつけたのちの積極策根基をおいた確実なやつを、おい、おっさん頼むぜ。Y. Y.

九月二十九日 <国民救済には教育の改革と新しい倫理を> <フィヒテを読め>

前記山本氏の意見には賛成賛成大賛成もっとやれ、もっとやれ！！

今頃敗戦云々といふのは古臭いかも知れないが、日本が戦に敗れて後、かつてのドイツに於けるフィヒテの如き人間が現れてくれたら、と。予科の時読んだが何だかむつかしい長たらしい、としか感想に残ってゐない「ドイツ国民に告ぐ」をよんでみた。

矢張り人間は、人が飯を喰つてゐるのを見ただけでは腹一杯にはならぬ。

話をするだけでは薪が切れぬと同様に本当に敗けてみなければフィヒテの言葉が身に浸みない。

諸兄、もう一度ドイツ国民に告ぐを読んでみたまへ！！

吾輩は涙の出る程の感激と共鳴をもって之をよんだ。もっともあくびで涙の出たこともあったけれど。彼フィヒテは、此講演において全歐洲の国民が最も完備せる罪惡と利己主義の社会をもつてゐたことを痛論し、この国民を救済するには国民教育を根底より改革し新しい倫理の時代を作らねばならぬことを熱烈に又、洵々と主張してゐる。民族問題として国民の覚醒を促したるその言葉は現代の日本社会には多大の参考になると思ふ。人生意気に感づるといふが、こんな本をよむと、何だか物すごくフィヒテみたいに雄弁になつたやうな気がしてしやうがない。

「読書といふ人間最大の特権を享受しないものは動物と同じだ」とヒルティとかいふ人が云つたさうな。著者の思想に直接触れたやうに非常に感銘をうけた本をよむと、吾輩は必ずこのヒルティの言葉を痛切に身に感づる。儒夫をも起たせるといふわけだ。扱々、日本にもフィヒテが今の時代に出ないのはどうしてだらう。日本の精神化学がドイツのそれの如く程度が高くないこともあるかも知れん。又その位の頭脳をもつてゐてもこんな長たらしい「日本国民に告ぐ」なんていふ講演をするのが面倒くさいのかも知れない。

要するに結局、つまるところが、日本には知つたかぶりの小才のきく小伶俐なペテン師みたいな、イカサマの香具師のモモンガーの……どこまで書いても同じだが……赤シャツみたいな人間ばかりであるからだらう。現代の日本はそんななのだ。昨日まで撃ちてし止まむ、アメリカ主義を絶対排撃してゐた人間が今日は、承諾必謹が泣くよ、まるで日本の国体なんてまるで便宜主義の総問屋みたいぢやないか。

この詐欺みみたいな軍人を見よ、政治家を見よ、七面鳥みみたいなジャーナリストを見よ、文学家を見よ、醜態の限りだ。こんなことは二千六百年の国民の歴史の最後のスキャンダルで

あってほしい。これからは国史の再建だ。疾風に勁草を知る、といふが、これぢやまるで勁草なんてどこにもない。

みんな弓削道鏡や足利尊氏みたいなやつばかりだ。少くとも結果から見れば、そうに違ひあるまい。

権力でもって居た国はその権力が無くなった時は空虚なガランドウなものになってしまう。永遠かはらざる精神で本当の文化で国を建てなければ、真の文化をバックに持たなければ八紘一宇も何のことはない風癪病院の誇大妄想狂と大してかはりないお笑いものだよ。

こんな時代にも少くとも学生だけは、まだ或程度純粹であつたと思ふ。我々だって本当に竹槍をもって突貫しやうと本当に、本当に考へてみた。欣々として特攻隊に加つた勇士が如何に多かつたか、戦争はスポーツじゃあるまいし、そう簡単に特攻隊に行けるものじゃないだらう、どうして純粹であり得たか、それは我々の信奉する学問がそうであるからだ。純粹の論理にひざまづく学徒だからだよ。

こうなれば薪切りなんて問題でないよ、ひとりでに解決する問題だよ、といへさうだが、どっこいさうは行かないのが寄宿舍の薪切りだ、アルバイトだ、配給取りだ、大体殆んど全部は善良なる舎生なのだが、ある認識不足の御仁の為に乱されてゐるといっても過言に非ず。

この日記のページをずーっと前に繰つてみたまへ、御たんねんにも長文で（こんな長いのは始めてかも知れないがね）赤字まで入れて何とかかんとか云つてゐるのは、みんな同じことを云つてゐるのだ。ずーっと文章の焦点をのぼしてみたまへ、自分でもよく分るだらう……その焦点に当る人は……由来この寄宿舍ではかゝる認識不足の人の生存をゆるさない……といふより前のY・Y氏の云へる如く自身の良心がゆるさなくてどんどん退舎されてゐるのである。あへて云う（墨筆でぬりつぶし削除三行半、欄外註記に「思想過激ニツキ三行半削除」とある）よ、いさぎよく。

大分長々と下らぬ事を書いた。大分極端になつたようだが楯の両面も必要なんだ。お恕しあれ。（KK生）

九月三十日 <異性を通して神々の恵みを知る>

精神と物質の葛藤、あらゆる文明と文化がここから生れた。

時計の振子の様にある時は精神が勝つて世界と民族に新清な朝が訪れるかと思ふと、やがてもう憂い真昼、物質の跳梁がやってくる。ローマン的時代はやがて廢怠の淵に移行せずにはゐない。成程札幌農学校の伝統はその初期に於て偉大なものであつたらう。しかし北大の学生がその抱負に於ても意志に於ても岩遠であつたためしはない。

それはぢく※※と湧く腐った池の様に硫化水素とメタンの様に影のうすい人格とは宗教的意欲など爪の垢ほども持ちあはさない、リベラリストか、赤にさへなりきれない様な我利我利の末人共しか生なかつたのである。

何をか価値あるものと言ふ。リップスの倫理学は我等にかく問ふ。人格的価値とは自らよくなり、その事によって他人をよくすることである。それは物質上の幸福主義とは無縁のものなのである。我等は最大の人格的価値あらんものと心懸けてゐる。

最大の人格的価値とは聖である。天を知り神を信ずる事である。我人は聖人たらんとして道を踐む、この心懸けなきものは到底吾人の道の友として歩むことを得ざるものである。

然り、吾人青年の豊富は大に、その意志に於て剛健なるは聖を知る故であり、札幌農学校の伝統に生き、大先輩にして吾人の信愛おく能はざる宮部先生を頂く我寄宿舍が偉大なる学生を養はんとするいとなみは、宗教的信念に根を持たなければならないのである。

先人内村鑑三先生と共に歩まん、これこそ青年寄宿舍の大信念でなければならないのである。それは世俗を押し、功利を退け、真と善と美とを求めて聖に至らんとする天地の大道でなければならないのである。

翻つてYY生の言はるる食糧に思案を向ける、食糧は、人間生物の生死に関するものである。然し乍ら公正に考へてみる時、学生が食物にとらはれてゐるのは見よいものではない（傍

線部について欄外に書込み——再考を要す、更に純理性的に！！現実的に！！）それは（削除三字不明、この部分について欄外に書込み——貴方も卑俗の一人たるをまぬかれない）然し乍ら食料の対策は建てねばならぬ。

計算によれば舎の周囲を活用すれば澱粉質に於て優に十俵を挙げうるのである。今年は仕方がない。然し来るべき春の増産に計画的に、肥料も労力も配置する事によって相当の量が浮ぶ、十俵といへば寄宿舎生二十人の3ヶ月以上に相対する。これは夢ではない。必ず出来る事なのである。残念乍ら今年出来なかったのに過ぎない。

もう一つは道産児が三分の二占むる当寄宿舎は実質的に夜食をやっている。これを公式的なものとして、舎に一度納めて平等に食ふ様に出来たら、どんなに舎が明るくなるかと思ふ、一人一月一升の米は年に五俵の米に相当するであらう。

以上の事は空論ではない、やる意志さへあれば出来る事ではないであらうか。

然し乍ら吾人はキリストではない。食物に経済的制約がつくのは止むを得ない。夜食を作ったら少しづつでも全部に食べて貰ふのが理想的であらう。しかし、それは不可能である。飯盒に一つのエッセンには限りがある。これは人の世の常の悲しみである。吾々はその時如何なる態度をとるべきであらうか。そのような悲しみの中から自らを高める動機を見出し得ないものであらうか。

更に又対異性の問題を考へる。異性は若い青年にとって夢の対象である。異性によってこの世に対する眼を広くし、神々の恵を知るに相違ない。それは然し、あくまでプラトニックな点に於てである（二行削除、削除部分判読不能）。

女性に対する感覚を現実のものとし、わいだんを楽しむが如き事も人生観の相異。

少くとも品性高き青年のなすべき事ではない。

最後に舎の人格的融合は互の魂を尊敬する事である。自敬とそして他敬の存在しない所に如何なる和合もあり得ない。寄宿舎に於ける最大の倫理は、身らを尊敬し、他を尊敬し、道の友として進む事でなければならない。それは卑俗なる談笑ではない、互に身を切る様な切磋であり、琢磨である。

それは寄宿舎の教養の平均ではない、寄宿最高の空気に皆なが従ふ事である。それはある人に窒息的であるかも知れない、その様な人は頑張り給へ。それが、その人にとっても最も良い事ではないであらうか。

宗教と読書と教養と労働と——これが自分の学問、自分の天職、以外の時間を占むる事が多ければ多い程その人は価値ありと言ひうべきではないであらうか。

新しい日本の道、それは決して低調で野卑な「社会人」によってなされるものではない。

殉国といふ事は自らを滅して多くの国民の為に働く事である。（五行削除、判読不能）

あまり熱をあげて書くと空虚もので、自分は今とりとめもないさびしさにおそはれています。このさびしさは秋深き為ばかりではない様です。恐らくは自分の胸の中にたまらない春の目覚がひそんであるのかも知れません。 以上 村上記

学生生活に関する熱心さは有難いが、貴方の云ふとほり、“空虚”であるのそしりはまぬかれぬ、更にこの文を草するに至った恐るべき心境を再生して再考せられよ。

赤線氏に一言寄す

私は貴君程激しく、私に切込んでくれた人を初めて見た。それ故に私は君に尊敬の意を表す。成程、君の云はれる通り、この文は恐るべき心境から生れたのであらう。

反省を知らぬ猪突さと云はるるかも知れない。私はその批難を甘んじて受けよう。

然し乍らこの文が空虚そのものであるとは、どうしても思へない。私は私の全人格を以てこの文に責任を持つ。それ故に私は君の批判に答へなければならない。

私は生きてゐる。それ故に食欲に飲み且、食ふ。私の食欲は猛烈であり卑しい。然し乍ら食欲それ自身は強い生命力の表現であり、善でもなく悪でもない。然し乍ら私の周囲を見廻

す時、私自身の食欲をどうしなければならぬか勿論、分明である。而もそれが経済的に制約される事は人間の悲しみだと思ふ。私はそこに人間向上の階梯を見る。宗教に入る門が開かれてみると思考する。(2行半墨塗り削除) 舎の規律を憂ふる人の行動とは受取れない。君の良心が益々こまやかに、ごまかしをしない様になるのを期待する。

最後に私自身の神経は過労の結果、明らかに疲労し鋭敏となつてゐる。私の文筆が確かに暴露的であり、煽情的であるのは神経衰弱の結果である。

この様に解釈されて、公正にして敬愛すべき君の心情が私を許さる事を望む。(こんなに紙を使って相済まないと思ひますが、何だかこのノートを言論のはけ口とする事は、ノートの欠乏といふ理由を以てやめにするのは勿体ない程楽しい事ではないでせうか。一度やめてみた週に一回の会合に、このノートについて話しあつたらと考へます)

十月一日 月 曇、晴 昨夜、特別室に会し、云ひたい事を云ふ。結局、薪切り成績発表制のこと、及び、来年の食料対策として種芋六貫の確保を決める。工学部廃止の噂飛ぶ。併しTの人々案外落付いたもんである。恐るべき事である。朝、増田君帰舎(夜より〇〇) 夜、田崎さん帰舎さる。病未だ全快せず明日病院に行かれるとか。岩瀬君本日より来舎となる。(石川)

十月二日 山本さん帰省す。一週間の予定だそうである。夕方、内田さん、河村さん、村上さん、徒舎の敷地の測量(平盤)を行ふ。面積<記入なし>

薪造りの方は頗る成績良好なり。

十月三日 特記すべきことなし。岩瀬君下宿へうつる 河瀬

十月四日 冬期の煙筒不足の対策につき一部の人の意見を聞く。然し特に名案もなし。河瀬

十月五日 <米軍、札幌に進駐> <舎の冬対策>

米軍札幌市に進駐。朝、電車通りの掃除をなす。昼頃から米兵の乗った自動車が盛に通る。新聞その他によれば、今年の食糧事情は相当悲壮らしい。舎に於ても、当然、相当の窮屈は覚悟せねばならぬ。復員学徒、アルバイト出勤の者の帰舎を迎へ、部屋の数も充分とは云へず、円筒も不十分。

冬の舎生活を迎ふるに当り心配は多い。種々の対策は今より着手するを要す。この時に於て舎生諸君の意見、名案を求むるや切なり。事の如何を問はず、気の付きたる事あらばどしどし申出られたし。

薪造り順調、食糧不足その他にもかゝらず、積極的協力を示さるゝ諸兄には真に感謝にたえず、薪のみならず、総ての面につき益々積極的協力を切に願ひします。

夜、十河君帰省 河瀬 登

十月六日 朝 兼坂君帰省、戸倉君帰舎。

朝から、からりと晴れて全く清新の気が漲つてゐる。昨晩は、連合軍の将兵も札幌での始めての夢を結んだことであらう。

午前九時から玉葱五十貫四俵、八百屋さんへ取りに行く。

力学的に考へて極めて不能率的な寄宿舎の車も終に退陣の止むなきに至つた。何の機会(ハズミ)か配給の四俵が五俵あつた。

道理で車も毀れる筈だ。少いのは気持悪いが、多いと満更悪い気持もしない。此も人間の〇い姿の表はれかも知れぬ。 辻 記

十月七日 今日青い秋空を一日中見てゐた。外界は、時正しく秋、紅葉も見える。落落あり、しかるにしかるにそれにもとんじやくなく勉強する医学部学生の真摯なる姿に頭が下るばかりではないか。天高く馬肥ゆる秋と満腹感を満喫してゐるときも……。

工学部学生は能率的に勉強すると云ふ。医学部学生は衛生的健全な勉強をする。

あゝ命旦夕に迫れり。

十月八日 <人格の陶冶と舎内の討論>

朝から晴々としめない天気、シトシトと終日、小雨が降り続く。医学部学生の試験を前に陽気な天気でない故勉強の方は、充分進捗された事だらうと思います。私は今日がこの日誌の書初です。少し私の感想を書かせて戴きます。私は環境申し分なき北海の天地幌の里の高校生活に憧れて来ました。誰も始めは白線帽に憧れますが、いざ被ってみるとそれだけでは満足しない次のより高き希望（ノゾミ）が湧いて来ねばならない。

高校生活は如何にあるべきか、幾多の俊秀なる先輩の践まれて行った生活に依って判然として居るではないか。然し戦時中の高校生活は如何にあるべきか——之が悩みの種でした。現在では戦も終末を告げ、又以前よりより善き高校生活をせねばなりません。がしかし、私が舎に来て以来——学部の人が大部分であるから高校生活を望むのは実際の所無理かも知れませんが——高校生活の一端にも触れ得なかつた。感激のある生活を一度も体験しなかつた。今後ともこの調子で行かなければならぬかと懸念する次第です。毎日、単純な生活を送って居ます。二五・六才となって高校に入学する人も居りますが、之等の人々は大概高校生活に憧れて入学すると云ふ（勿論、大学を出た後の事もあります）私の高校生活は中学校の延長に過ぎない。学部の人々は高校生活を味はひ終った人々ですから今更高校生活をして下さいといふのではありません。

が、何かしら学部の人には近づき難い。私は舎を嫌って居るのではありません。舎には幾多の美点があります。

たしか中津君だったと思ひますが、オルガンを弾いて居ました。耳を澄して聞いて居ると、あの情緒豊かな感激に富んだ「都ぞ弥生」の音律が流れ込んで来ました。

あゝその時の私の心は——

私は人格の陶冶といふことに就て何か良い方法があればと思つて居ます。一週に一回一時間位の会合があつていゝのではないかと思ひます。この会合に依つて積極的な意見も出るのではないかと思ひます。私は書く前にこの日誌を繙いてみると、日誌の上に於て激烈なる討論をして居る部分があります。之も必要ですが、直接討論した方が、より効果的だと思ひます。会合などに依つて（まあ人格の尊重といふ意味で少しまづい点もあるかも知れませんが）今日の新聞をみると食糧の輸入を仰ぐことが出来ないとか。益々食糧事情が窮屈になることを覚悟せねばなりません。前途は多難、大いに頑張りませう。（十数文字墨塗りで削除） 増田

十月九日 朝よりどんより曇つた日である。何となしに陰気でならない。

午前中のみ授業あり、午後、石川さん、山本さんと一緒に薪割りを行ふ。相当順調に進み喜ばしい。今後とも暇を見て大いに頑張り抜き、冬の準備を〔数文字不明〕

尚、来年の馬鈴薯作付用の種薯は、〔数文字不明〕期間は移植から何日位なのですか。

十月十日 朝より大層雲が濃い。医学部学生の試験最中なる故張切つて居られる。朝薪を割る。

夕食後、辻さんが学校にて解剖を行った馬肉でスキヤキをして食ふ。皆満腹感を十分味はふ事が出来た。自分も大層本望であつた。夜十時半就寝。

十月十一日 雨が降つてゐる。今日ありの寒さは、又身にしみる。火が恋しくなる。兼板さん帰舎 以上 十河記

十一月一日 十一月の声を聞くと寒さが身にしむる感がする。

もう後二日で記念祭である。毎晩劇の稽古やエッセン作りで忙しい。

石田さん今日を期して退舎す。今度南六条西十五丁目に下宿することになった様子だ。予科生が一人もおらずに記念祭を催すのは何となく心細く感ずる。（十河）

十一月二日 変つた事なし。雪模様の天候である。寒さ身にしむ。（十河）

十一月三日 <敗戦直後の記念祭> <舎長、辞任の意を表明>

楽しき一日なるかな。私達舎生は永久にこの日を忘れないでせう。

朝ほつほつとひとひらふたひら落ちて居た雪に土は濡らされ、舎生一同掃除し、ガラスをふき、落葉を寄せ、飾りつけをなし、机や本箱は白クロスでつゝまれ、室中が、赤と黄と緑のモールでよそほはれました。

草地兄は一昨日よりの感冒に加へて、河村兄も又感冒とか。さびしさびし。

晝は南瓜の饗応、小母さんは一日忙しい。

十二時、一時、二時となると亀井、逢坂、前川、犬飼、奥田、青木、前川、時田、平戸、斎藤、菅沼の諸先輩と北野兄がお迎へにゆかれた。宮部先生を中心にして舎生十五名がならぶ。

開会の辞

宮部舎長の御訓辞、舎長、副舎長の改選について言及される。

舎長をおやめになりたいとの言葉を伺ったときは、宮部先生がいつまでもいつまでもお元気でゐてくださったらいいなあと、思はず目がしらがあつくなる。

副舎長挨拶 烈々として真面目である。

舎生祝辞

飯田君、君の祝辞の明晰なる、内容の豊富なるまことに感嘆す。

山本君、君の舎の精神と物質との生活が「おいエッセンあるぞ」といふ叫びに端的に表現されてゐるといふ。名論に思はず息を呑む。

村上、私もいさゝか祝意を表したりき。

続いて斎藤先輩より魂のよりどころとして寄宿舎について燃ゆる様な告白あり。菅沼先輩、逢坂先生、前川先生などより後輩を思ひ、舎を思はるゝの注告あり、訓戒あり。余輩皆心を開いて先人の道を踏まんと決意をしたのであった。

宮部先生は、伊藤農学部長令嬢御結婚の式に列せられんため退席せられました。

その後、南瓜、酢のもの、からしなのつけもの、簡易なるしかし心からの食事をいたしてのち散開（会）いたしました。

夜は夜で「飲めや唱へのどんちゃんさわぎです」

古き歌、新しき歌、漢詩あり、英誌あり、独詩あり。

点々として劇を配す。恋人といふ村上、十河君の歌劇に初り、吉五郎てふ浪曲を内田、河村氏熱演され、金色夜叉、河瀬、内田氏の乱暴劇あり。

若い人を北野、河村、辻、中津、清水の諸氏なまめかしい衣装に、太い男の声をむりにも細くしてニヤケくさい様子は全く抱腹絶倒、みよこちゃんまでくすくす。石川、村上氏のインチキ大学などありぬ。

一等は「若い人」「インチキ大学」に帰す、南瓜一ヶ拝領す。

個人賞は内田氏に当る。

そののち米軍の機関銃のお見舞ひをうけぬために舎外ではやめて食堂でストーム、かくてこの日の多彩な喜びの幕を閉じたのであった。（村上記）

十一月四日 例の如くして例の如し、本朝のごん太は、ぐっと余裕を持って十時以後に行れたらしい。

昼、昨日、団体賞を獲得した若い人、インチキ大学のグルッペ南瓜を提出、皆んなが喰った。

午後より勉強部屋にストーブを取付、早速今日より焚く。実に快的である。（中津記）

十一月五日 今日もどんよりとした一日であった。夕方奥田先生が舎にお出になった。舎長の事についての打合せの為

十一月六日 相変らずの曇天、幾分の暖かさを感じる天気なり。小生、故郷の先生より手紙を戴く、「いや淋しき若は残る秋の野辺」、海軍飛行の基地を引渡した時の師団長の歌である。その基地は小生の家から三里程より離れていない。家郷の豊饒ならぬ寂しさを聞き齎しく同胞の上に寒さを感じる。

「あゝかくまでも寂しく寒き秋よ」、本吉氏帰舎。

十一月七日 林子の配給あり。

河口氏副舎長退陣、代って田崎氏就任す。

各部部長選定あり。

十河退舎、在舎一年半に亘る。いそ騒しいにぎやかな男であったが、たしかにミュージカルな点に於いて花形、惜しいことだ。今度は岩見沢の自宅より通学とのこと。

内田氏三（空白）井に行く。

十一月八日 野菜収穫多量あり、漬物原料とのこと。

映画新作鑑賞に行く者多し。「千日前附近」「海を呼ぶ声」。河村氏帰家、日曜まで。舎の固有エッセン猛ケツ、ソロソロ仕入れをせねば、勉強も落付かん、しかし、仕入れればそれなりにいそそがしくて落付かん、いづれにしても腹がへってもひもじうないといふが如き非科学的人種はおらんやうである。

農学部主催の球技大会、後のエッセンが結局問題の決勝戦であるとは、さてもせち辛き世の中かな。

十一月九日（金）

十一月十日（土）山本、秩父別へ。

十一月十一日（日）

十一月十二日（月）山本昼帰る。

十一月十三日（火）望月さん来舎。夜は寄り集って歓談。

十一月十四日 林子配給。平帰舎。

十一月十五日（木）

拾壹月廿七日（火）曇 温度10℃

朝から非常に寒い。昨夜はいよいよ明日からは雪降かと思つて居たが、未だ雪はない。

南国の小生は未だズボン下をはかないで頑張つて居る。

休日は日一日と近づいて来る。しかし、こうして休日を前にしてたのしんで居る時が一番良いのではないかと思ふ。

近頃、舎にはエッセンもつきたと見えて、エッセンの掛声も無くなった。ホームシックは益々はげしくなつて来た。

この日記が今迄この部屋に有るかと思つたら当部屋に有り、全く恐縮にたへません。当部屋以外の諸兄におはび致します。 Y. S. <この11月27日のみ横書>

十二月四日 本日授業がないので登校しなかつた。台所にゐて考えるでなく、考えないなし、さうかと言って勿論、無念無想等といふ境地でなく、ぼんやりといふ語が一番あてはまる様な半日を過した。さうした生活を全然無意義だといふ人が多いであらう。然し、当人にとっては、それが大変たのしい時間であることがあるだらう。少くとも私の場合そうである。

午後、七号室にて、之又読書に半日を送る。今日は無意義な様な、意義ある様な一日を送つた。

十二月五日 今年の冬は大変雪が少い、例年ならもう相当に積つてゐるはずである。雪の少い事はそれ自身としてはありがたい事であるが、然し、それは気象上の変異である以上それに関連しておこる次の変化が我々の生活に重大なる影響を与へる事を思ふとやはり平年なみの降雪のあつた方がありがたいような気がする。

近頃部屋が快い。机、本箱が与へられると不勉強を以ては誰にも負けないつもりの私も少しは勉強をする。

我々は——特に意志の弱い者は——環境に支配され勝である。環境を支配出来る人を見ると私はうらやましくなってくる。それでも支配されるとはいへ勉強が出来る様になつたのはうれしい事である。

十二月六日 午前十時頃登校、五時過帰る。

本日行なふべき月次会は取止めて、休の為、サヨナラパーティーを行ふ。エッセンは近頃珍しい程多量の馬鈴薯。各自種々の演芸を行う。それ各種の注意、函書の貸出あり。

九時過開散。

十二月七日 今日十二月だと云ふのに大変暖かい。暖かいのは結構だが雪が溶けて道路は泥濘の沼と化して不愉快此上もない。

そろそろ休暇らしい雰囲気が現はれ、十日過ぎに帰る道内の人達は愉しそうである。

懐しい故郷の幾山河、好しき憩ひの我家、学生にとって此程（数文字削除）魅力的で愛情的なものはあらうか。彼等の数ヶ月間の努力の賜を秘めて故郷へ去って行く……。

十二月八日（晴）

四時に起床、河瀬、村上、草地、平君と一緒に駅へ行く。かすかに見えるのはまさしく人の大行列だ。いさゝか驚く。二時間立ちんぼうしてやっとキップを買ひ求める。実に大恐怖だ、旅行も大変だ。

一ヶ月以上も舎の日記を記入せず。実に変れば変るものだ。昔はかゝるふしもなかりき。

改善したいものだ！！

平君帰省さる。（本吉）

十二月九日 <燃料不足で大学は冬季休業>

昨日を以て農・理学部以外は休みとなる。休は大体二月一ぱいの予定。之から次第に舎も閑散となるだらう。

草地、村上君本日昼、帰省。河瀬は明日帰省の予定。

十二月十日 晴後雪

今朝まで雪が皆無だったが午後から降り続いて二、三寸積った。夕方はカレーのおかげで久し振りの魚であった。

新聞に明年一月ソビエト兵が本道へ来ることが書いてあった。

朝、河瀬氏帰省さる。晩、田崎サン帰省サル。

十二月十一日 晴

朝、戸倉、辻両氏帯広に帰る。辻氏は二日程にて帰る筈。

夜、内田氏御簾前に行く。兼板氏家に帰る。昨夜より降り続いた雪が積り、寒さ一入身にしむ。

舎は日を追ふにしたがひ寂しくなるばかり、もるゝ灯のさゝやきも余燼幾許も無きを想はしむ。舎の萎びたる様に事更に目に付く。ストーヴを囲む数人の日、茶の香にむせぶ宵も得なる哉。

清水本夕帰省の予定延びる。

十二月十三日 曇

朝、田崎氏函館より戻らる。一百人程溜ってゐる由、ヤレヤレ。

辻君も帯広より帰る。夜、再三フェーズ切れる。 石川

十二月十四日

本日快晴、ちぎれ雲尾を引き飛んでゆく。

なんだか詩でも出来そうだ。

十二月十五日

本日清水君帰省さる。

配給米を取りに行けどもかんじんの配給すべきもの未到着、何をどれだけ配給せんか不明なりと。増々寒さは増し、何と心細い限だ。小樽港に米船入ったとやら、何ら影響なし。

北野、辻両君角田へゆかれる。

十二月十六日

田崎さん帰省さる。

朝から雪が降り続き相当積ってゐる。何だか雪降が続く様な気がしてならない。

十二月十七日

北野、辻両君角田より帰る。

おゝ寒い、又もや積ってゐる。その上まだ降り続いてゐる。

辻、今井両君円山に行けども未だ雪少くて残念そうに帰らる。

十二月十八日

なんと起きてみれば、又もや大雪、ジープですらあへぎあへぎ歩いてゐる。まるで雪だるまがうなつて走ってゐる様なり。まして電車をや、線路うづまり何時開通するやら、二、三日は見込なし。

いさゝか暖く雪質は所謂内地で見られる様などっしりとした重い雪なり。

十二月十九日<これ以後、燃料不足で大学が12月9日から2月末まで冬休みのため、寄宿舎閉鎖。3月の再開まで日誌記録なし>